

一般国道202号線自歩道設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

# 深江辻遺跡

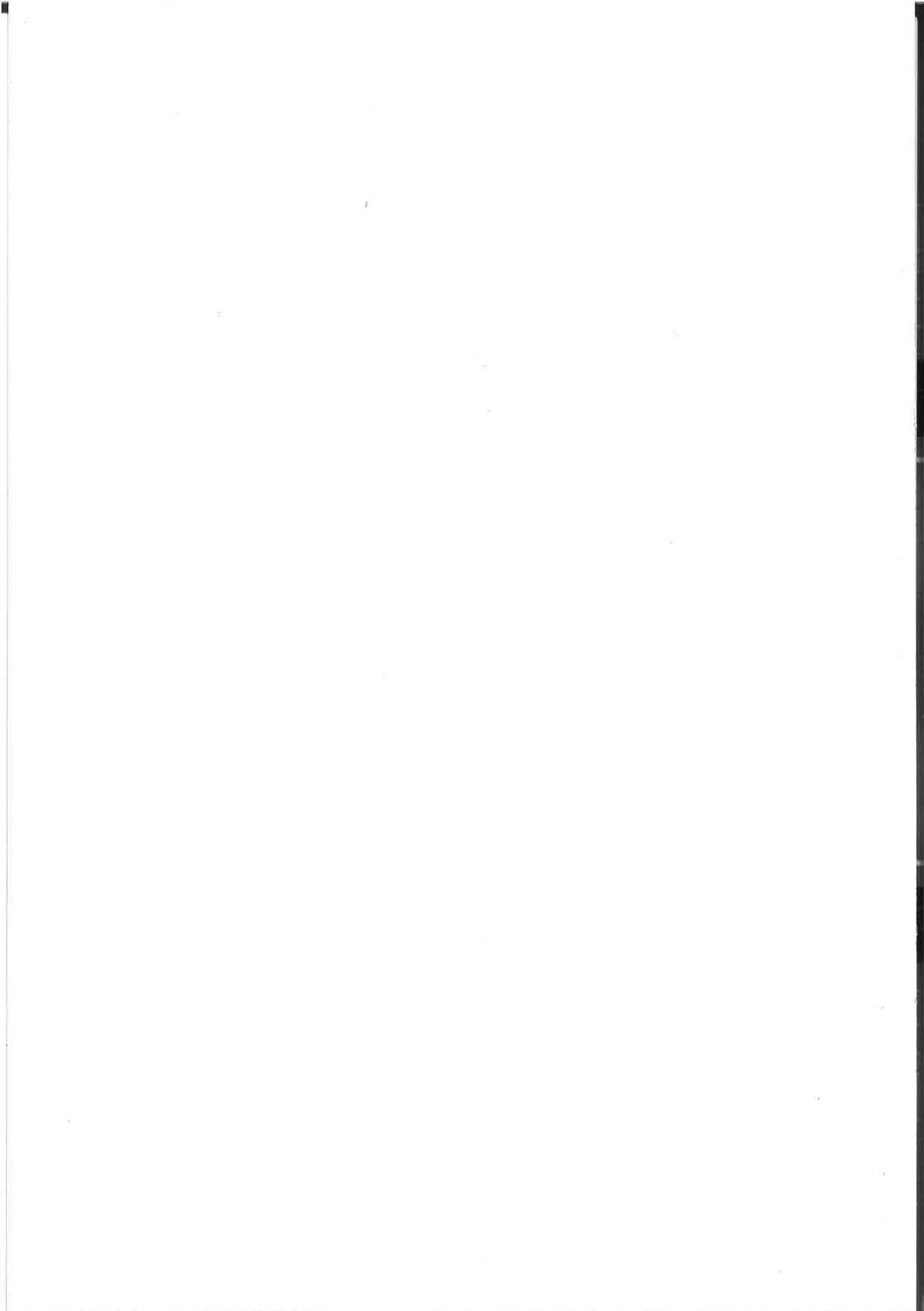
福岡県糸島郡二丈町大字深江所在遺跡の調査報告

二丈町文化財調査報告書

第41集

2008

二丈町教育委員会









辻遺跡全景





石組み井戸



壺棺墓



## 序

本書は二丈町深江地区における国道202号線自歩道設置工事に伴い実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書であります。

同地はこれまで中・近世期以前の遺構は存在しないものと考えられていた地域であり、今回、弥生から鎌倉期までの遺構が確認された意義は大きいものであります。

今後、本遺跡の調査成果が「伊都国」研究のみならず、我が国の考古学研究の一助となれば幸甚であります。

平成20年3月31日

二丈町教育委員会

教育長 藤田孝治

## 例　　言

1. 本書は、国道202号線歩道設置工事に先駆けて実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査ならびに報告書作成事業は国土交通省福岡国道事務所からの委託を受けて、二丈町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査の期間は、第2次を平成14年11月2日から平成15年3月17日まで、第5次を平成18年4月10日から平成18年5月19日までの間で実施した。
4. 報告書作成事業は、平成19年9月1日から平成20年3月15日までである。
5. 本書に掲載した遺構図の実測は、株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
6. 発掘調査における空中写真撮影は、有限会社空中写真企画に委託した。
7. 遺構の写真撮影は、古川が行った。
8. 本書に掲載した遺物の実測ならびに遺物写真の撮影は、古川が行った。
9. 本書の執筆ならびに編集は、古川が行った。

## 本　文　目　次

頁

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	2
II. 位置と環境	
1. 位置と環境	3
2. 深江市街地遺跡群	5
III. 調査の記録	
1. 辻遺跡第2次調査の概要（平成14年度調査）	11
2. 検出遺構	11
3. 出土遺物	21
4. 辻遺跡第5次調査の概要（平成18年度調査）	32
5. 出土遺物	35
IV. 調査のまとめ	

## 図 版 目 次

	頁
第1図 遺跡位置図 (S = 1/50,000) .....	4
第2図 深江市街地 調査地点図 (S = 1/2,500) .....	6
第3図 周辺地形図 (S = 1/2,500) .....	8
第4図 第2次調査 全体図 (S = 1/200) .....	折込み
第5図 II-① 遺構配置図 (S = 1/50) .....	12
第6図 II-① 石組み井戸実測図 (S = 1/30) .....	13
第7図 II-① 溝状遺構・1号土壙実測図 (S = 1/30) .....	14
第8図 II-② 遺構配置図 (S = 1/50) .....	16
第9図 2号・3号・4号・5号・6号土壙実測図 (S = 1/30) .....	17
第10図 II-③ 遺構配置図 (S = 1/150) .....	18
第11図 7号・8号土壙、1号・2号溝状遺構実測図 (S = 1/30) .....	20
第12図 II-① 出土遺物実測図 (S = 1/3) .....	22
第13図 II-① 遺構検出面出土遺物実測図 (S = 1/3) .....	23
第14図 II-② 出土遺物実測図 (S = 1/3) .....	24
第15図 II-③ 出土遺物実測図-1 (S = 1/3) .....	26
第16図 II-③ 出土遺物実測図-2 (S = 1/3) .....	28
第17図 II-③ 出土遺物実測図-3 (S = 1/3) .....	29
第18図 II-③ 出土遺物実測図-4 (S = 1/3) .....	30
第19図 V-① 遺構配置図 (S = 1/50) .....	32
第20図 第5次調査 全体図 (S = 1/200) .....	折込み
第21図 V-① 出土遺物実測図 (S = 1/3) .....	35
第22図 V-② 甕棺墓実測図 (S = 1/20) .....	35
第23図 V-② 遺構配置図 (S = 1/100) .....	36
第24図 V-② 甕棺実測図 (S = 1/6) .....	37

## 写 真 図 版

卷頭カラー図版1 辻遺跡全景

卷頭カラー図版2 石組み井戸・甕棺墓

写真図版-1 (上) 第2次調査地全景 (真上より)

(下) 同上 (北側より)

写真図版-2 (上) II-① 全景 (真上より)

(下) II-② 全景 (真上より)

写真図版-3 (上) 石組み井戸全景 (真上より)

(下) 同上 (東側より)

写真図版-4 (上) 溝状遺構全景 (東側より)

(下) 土師皿検出状況

写真図版-5 (上) II-③ 全景 (真上より)

(下) 同上 (南側より)

写真図版-6 (上) II-③ 北半全景 (真上より)

(下) II-③ 南半全景 (真上より)

写真図版-7 (上) II-③ ピット検出状況

(下) II-③ 溝状遺構検出状況

写真図版-8 (上) 土鈴出土状況

(下) 同上 (拡大)

写真図版-9 第2次調査出土遺物1

写真図版-10 第2次調査出土遺物2

写真図版-11 (上) 第5次調査 V-① 全景 (北側より)

(下) 同上 (南側より)

写真図版-12 (上) V-② 全景 (真上より)

(下) 同上 (南側より)

写真図版-13 (上) V-② 遺構検出状況 (真上より)

(下) 同上 (北側より)

写真図版-14 (上) 甕棺墓出土状況 (南側より)

(下) 甕棺

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

平成13年11月、国土交通省福岡国道事務所より二丈町深江における埋蔵文化財の有無についての照会がされた。当該地では国道202号線自歩道設置工事を計画しており、現在、用地の調査中であるが、平成14年度中には用地買収を完了させて、工事に入りたいとの意向であった。

11月20日、福岡国道事務所、二丈町都市整備課、教育委員会の三者による第1回の調整会議を開催したが、同地では県道拡幅工事に際しても埋蔵文化財（辻遺跡第1次）が確認されていたため、遺構が検出される可能性が高く、早急の試掘調査の必要性を提示した。結果的に平成13年度中に試掘調査を実施し、状況によっては平成14年度中に本調査を開始することで合意に達した。

試掘調査は平成13年12月19日に実施している。調査ではバックホーを用いての遺構検出作業を行ったが、地表以下-60cmの高さで柱穴状ピット、溝状遺構を確認、弥生土器から近世陶器までの幅広い時期にわたる遺物の出土をみている。また、遺構はさらに西側への広域に広がる様相を呈しており、深江駅周辺までの遺構確認調査の必要性を提示した。

この試掘調査の状況を受けて、平成14年1月15日に第2回調整会議を開催したが、工事自体は平成15年度中であるため、平成14年度中に用地買収を行い、買収後、本発掘調査に入ることで合意に達している。

平成14年11月、用地買収の完了を受け、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく、埋蔵文化財発掘の通知がなされた。これを受け、11月29日付けで発掘調査業務委託契約書を締結し、辻遺跡第2次調査として本発掘調査を開始することになった。

同調査（辻遺跡第2次）は、平成15年3月17日に終了しているが、同地より西側、JR筑前深江駅周辺においても自歩道設置工事は続くため、本調査中である平成14年11月に深江駅前の試掘調査を実施している。試掘の結果では、柱穴状ピットの外、弥生後期の甕棺墓1基が検出され、用地買収後に本発掘調査を実施することで双方合意、試掘地点の遺構を埋め戻し、用地交渉の結果を待つこととした。

平成18年1月、深江駅前交差点までの用地買収が終了したとの連絡を受け、福岡国道事務所との3回目の協議を行い、次年度4月から本発掘調査を開始することで合意した。これを受け、平成18年4月5日付けで発掘調査業務委託契約書を締結、同月10日付けで文化財保護法第99条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の着手の報告を行い、辻遺跡第5次調査として発掘調査を開始している。また、調査は5月19日で終了している。

平成14年度（第2次）、平成18年度（第5次）の発掘調査の完了を受け、平成19年3月29日に報告書作成業務に関する協議を実施した。この中では2カ年度にわたる調査面積が509m<sup>2</sup>にしか達していないため、1冊にまとめることとし、平成19年度に遺物整理、報告書作成を行うこととした。このため、4月より作成準備に入ったが、結果的には平成19年9月3日付けで委託契約を締結し、同月より遺物整理作業を開始、報告書作成作業に入っている。

## 2. 調査の組織

発掘調査ならびに報告書作成に従事した組織は、以下に記すとおりである。

発掘調査（平成14年度・辻遺跡第2次調査）

調査主体 二丈町教育委員会

総 括 教 育 長 藤 田 孝 治  
教 育 課 長 青 木 槟 夫

庶 務 教育課課長補佐 大 庭 一 成  
社会教育係長 清 水 絹 枝

調 査 社会教育係主査 古 川 秀 幸

発掘調査（平成18年度・辻遺跡第5次調査）

調査主体 二丈町教育委員会

総 括 教 育 長 藤 田 孝 治  
教 育 課 長 大 庭 一 成

庶 務 教育課課長補佐 松 藤 公 元  
文化 係 長 古 川 秀 幸（兼：調査担当）

調 査 囉 託 菅 さとみ

報告書刊行（平成19年度）

調査主体 二丈町教育委員会

総 括 教 育 長 藤 田 孝 治  
教 育 課 長 松 崎 治 幸

庶 務 課 長 補 佐 松 藤 公 元  
文 化 係 長 古 川 秀 幸（兼：調査担当）

調 査 囉 託 菅 さとみ

## II. 位置と環境

### 1. 位置と環境

二丈町は福岡県の最も北西に位置しており、町土の大きさは南北8km、東西13kmを測り、総面積は57.07m<sup>2</sup>となる。地形の特徴は北側が玄界灘に面し、南側からは脊振山系の山々が迫るために、平野部が狭く、町土の56.7%を森林面積が占めている。また、東西に長い地形のため約17kmに及ぶ海岸線を有し、海浜部には砂丘が形成されている。

辻遺跡が所在する二丈町大字深江地区は、町東部に広がる深江・一貴山平地の北部域をあたる。同平地は一貴山川、羅漢川、柳川が運んだ土砂によって形成された沖積平野であり、町内最大の平野部となる。同地区では元来、その地名からみて平野形成前は深江湾が内陸部まで進入しているものと考えられており、先史以前の遺構は存在しない地域と想定されていた。しかしながら、実際は弥生早期を初めとする弥生時代の遺跡が点在していることが近年の発掘調査で判明しており、縄文期以降、かなり陸化が進んでいたことが確認されている。

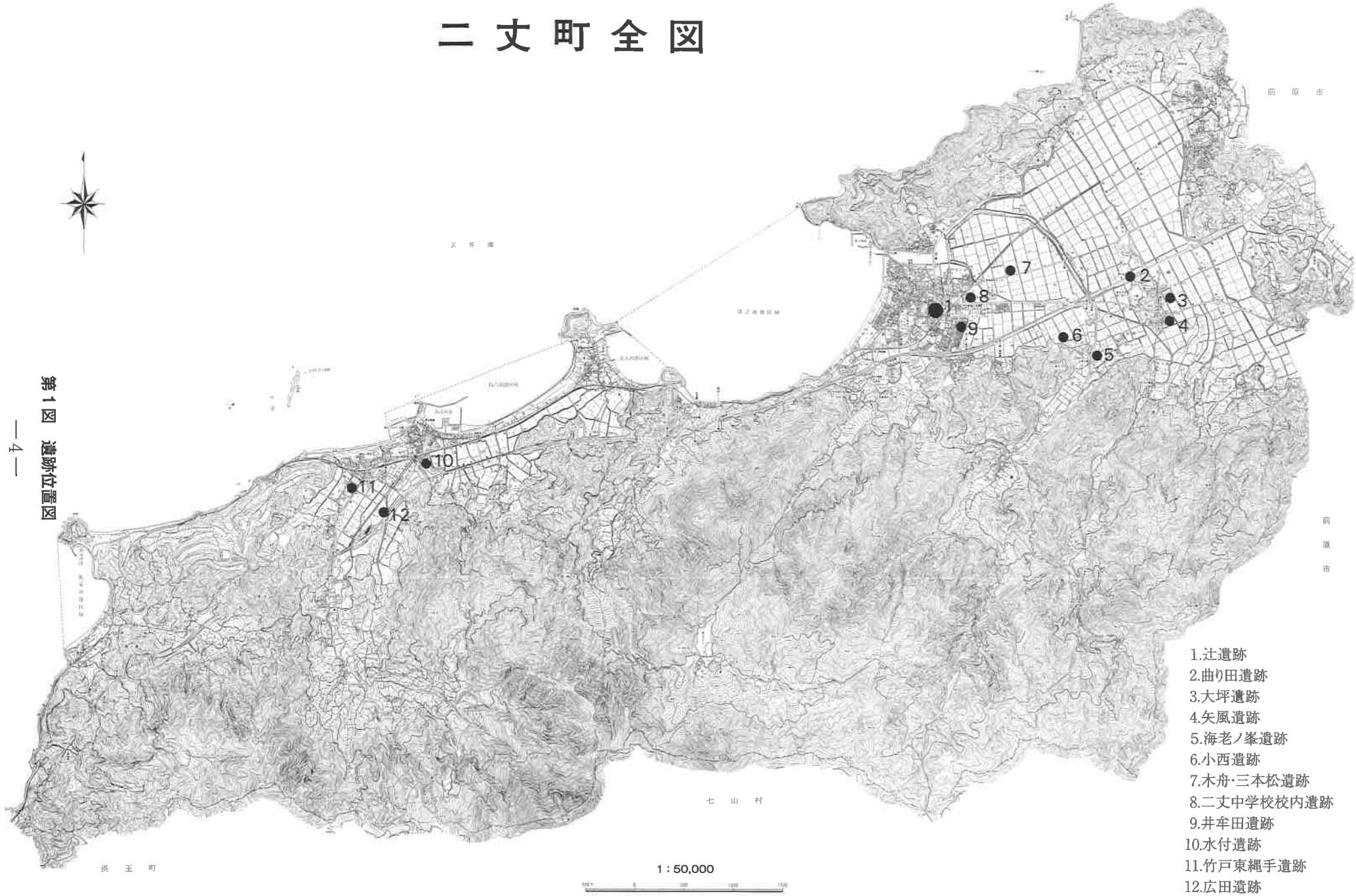
本書報告の辻遺跡を含め、同地で確認されている弥生時代の遺構は砂丘上で確認されている。砂丘は深江湾の後退に沿って形勢されてきたものであり、南側より第1から第3砂丘と呼称しているが、第3砂丘は現在の海岸線に沿って形成されているもの（新砂丘）で、古砂丘としている第1砂丘と第2砂丘に弥生期以降の古代の遺構が集中していることとなる。

この第1砂丘上では、南側から楽浪系漢式土器や中国式系銅剣が出土した井牟田遺跡や環濠と成り得る溝状遺構が確認された二丈中学校周辺遺跡など弥生後期を中心とした集落遺構が広い範囲で立地しており、同時期の拠点集落と成り得る地域である。この砂丘の北側では独立した状況の砂丘が形成され、木舟・三本松遺跡という弥生中期前半を中心とした甕棺墓群が立地、甕棺墓以外でも弥生早期の朝鮮系丹塗り磨研土器の出土している点には注目できる。また、同地のさらに北端、入り江に面した部分においては木舟の森遺跡という平安期から鎌倉期の居館跡が確認され、大量の龍泉窯、同安窯青磁が出土している点は、大陸、半島との貿易拠点と考えられ、遺跡自体は当地を押さえる豪族の居館と捉えることができよう。

次に第2砂丘であるが、古代の遺構は山側に近い西側に集中しており、弥生中期の甕棺墓群と考えられる松原遺跡（土取りにより消滅）や古墳後期の円墳が確認された塚田遺跡が乗っている。また、深江湾に面した西北部では古代駅伝制の役所である「深江駅家」推定地とされる塚田南遺跡があり、怡土地区西部の陸路、海路ともに押さえる最重要地と考えられよう。

本書掲載の辻遺跡は第2砂丘の東側部域にあたる。同地域では、これまで古代の遺構は検出されておらず、近世期、唐津街道成立以後に「深江宿場」縁辺部域として発達したものと考えていたが、今回の調査において弥生後期の甕棺墓が検出されたことにより、第2砂丘全域でも弥生期の遺構が広がることが想定できる。今後、深江駅周辺における調査には慎重を期する必要があるし、「深江宿場」や「深江神社」が設置されている第3砂丘上においても古代の遺構が存在する可能性もあり、今後の調査に期待が持てる。

# 二丈町全図



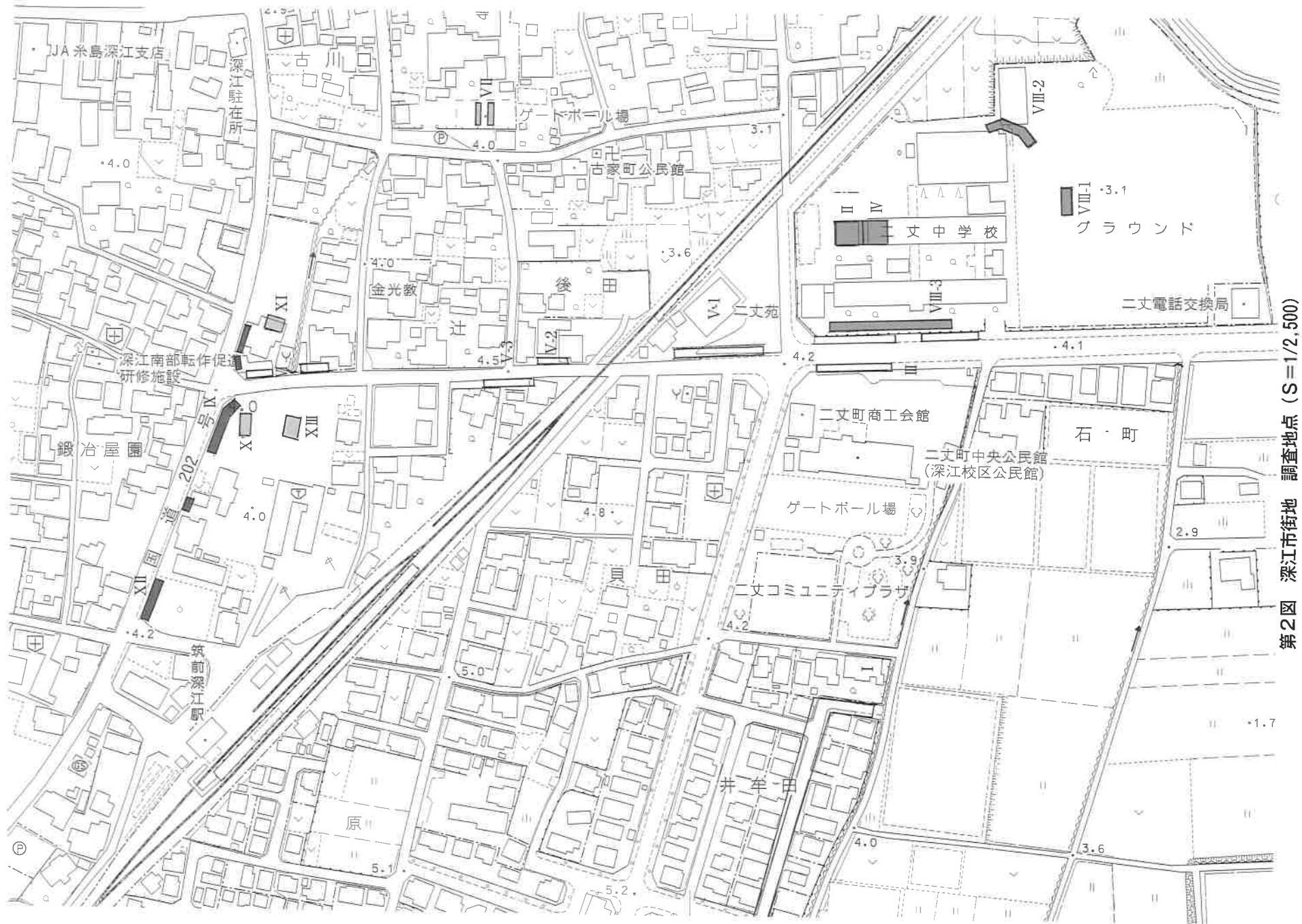
## 2. 深江市街地遺跡群

二丈町大字深江の市街地については、本書の調査原因である国道202号自歩道設置工事の外、県道大野城・二丈線拡幅工事、二丈中学校建築などこれまでに13次にわたって調査（表-1）を実施してきている。同地ではこれまで遺構は存在しない地域と考えられていたため、調査の機会が少なかったが、平成2年度の井牟田遺跡の確認を契機に縄文期以降、同地域は既に陸化していることが判明し、同調査以降、断続的に発掘調査を実施する運びとなった。概要については前項でも触れているが、大規模宅地開発に伴い発掘した井牟田遺構からは舌状の古砂丘（第1砂丘）上において祭祀土壙をはじめ、溝状遺構や柱穴状ピットが検出され、東側湿地帯からは多数の弥生土器の外、楽浪系漢式土器や中国式系銅劍などが出土、伊都国西部における窓口的性格の拠点集落と考えられる調査結果を得た。また、平成5年度より開始した二丈中学校校内遺跡の調査では弥生中期の甕棺墓や後期の溝状遺構が相次いで検出され、平成7年度に確認した大溝の状況からみて井牟田遺跡と一連の遺跡と判断でき、環濠集落となる可能性も考えられる結果となった。同遺跡からは弥生期の外、中世期の遺構も目立つ。平成14年度、同校グラウンド工事に際しての第4次調査において直角に曲る環濠の一部を確認し、同安窯青磁などが出土している。全様は不明であるが、木舟の森遺跡同様の居館となる可能性が高い。

平成11年度、県道大野城・二丈線の歩道設置工事に伴う発掘調査が開始されたが、貝田遺跡と命名したJR貝田踏切付近においては近世期の畝状遺構、土壙、柱穴状ピットなどを検出、近世磁器の外、須恵器などの出土を確認した。続く、平成14年度の辻遺跡第1次調査では、近世期の井戸や溝状遺構が検出され、同年調査した正覚寺境内遺跡では近世墓の出土から考えて、同地一帯には近世を中心とした遺構が広がるものと想定でき、正覚寺を含め、唐津街道の設置以降に栄えた近世深江町の縁辺部として発達したものと想定していた。

こうした状況の中、平成15年度より国道202号線自歩道設置工事に伴う発掘調査を開始したが、第2砂丘上と考えられた辻地区（辻遺跡第2次調査）において中世期の石組み井戸を検出、近世期以前に集落が存在していたことを裏付けられる結果となった。また、包含層を中心として弥生土器が出土していたため、第2砂丘の北東部域にも弥生期の遺構が存在する可能性を示唆することとなり、市街地内における調査の在り方を検討し直さなければならない状況となった。その後、平成18年度の深江駅前地点（辻遺跡第5次調査）において弥生後期の甕棺墓が出土し、深江地区における遺跡の立地状況を再検討することになった。

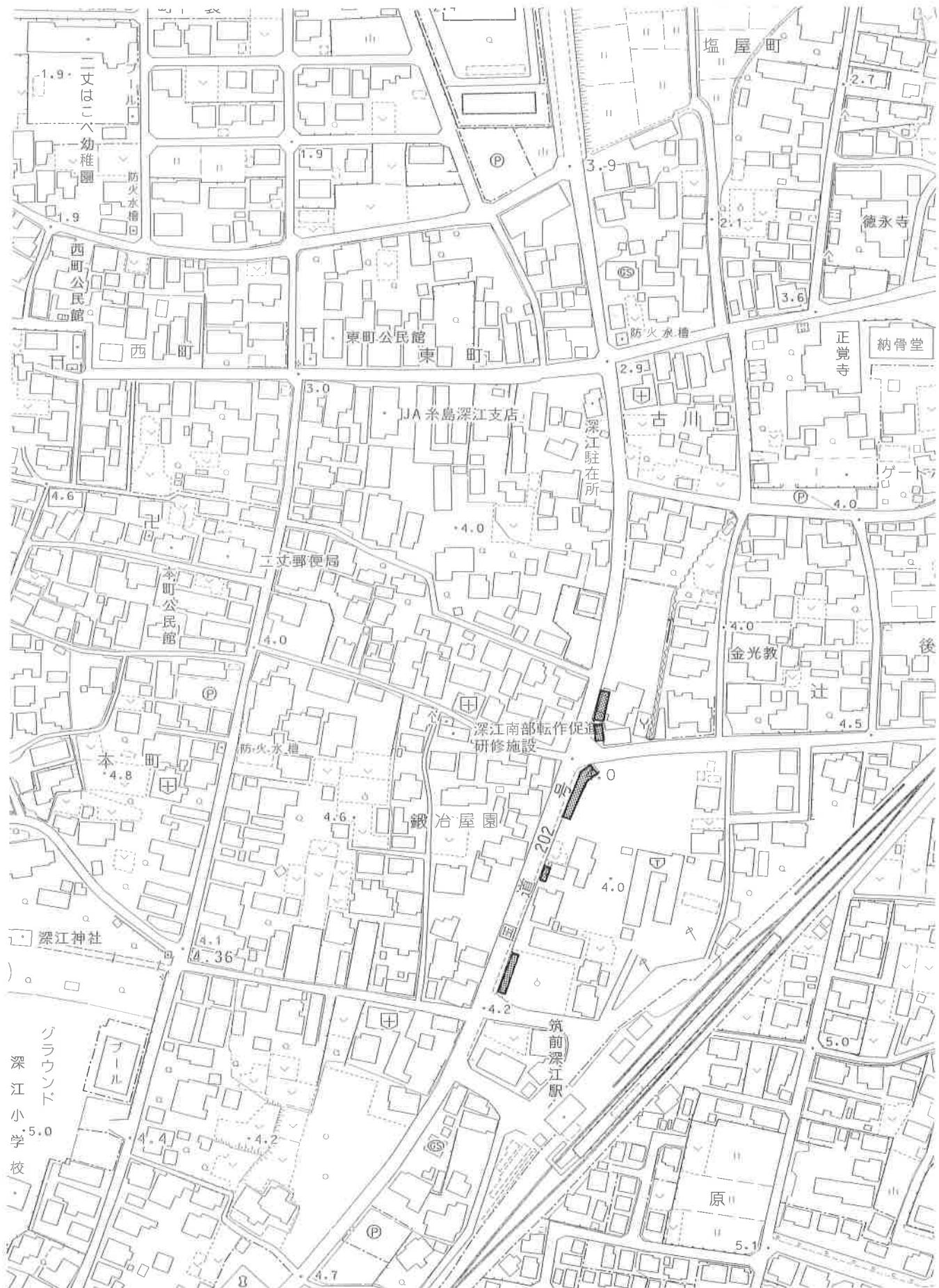
これまでの調査を総合すると、深江平野の古砂丘上の広い範囲において弥生中期前半頃より集落、甕棺墓が営まれ、後期後半で大規模集落へと発展、伊都国の窓口的性格を持つようになり、古墳期には西側山裾部分にその中心域が移動することになる。また、深江湾を望む部分には官道が通り、古代の役所（深江駅家）が設置され、同様に中世期以降でも大陸との交易拠点として在地系の豪族居館が営まれていた状況になる。その後、唐津街道整備後には深江市街地を中心に宿場町（第3砂丘上）が形成され、縁辺部が生産地域に変貌して現在に至るものと想定できるが、今回の調査結果からみても第3砂丘上にも古代の遺構が確認される可能性を秘めている。



第2図 深江市街地 調査地点 ( $S=1/2, 500$ )

地点	遺跡名	時代	主な遺構	調査原因	調査年度	備考
I	井牟田遺跡	弥生後期～終末期	祭祀土壙 土器だまり	民間宅地開発	1990	『深江 井牟田遺跡』1994
II	二丈中学校校内遺跡－第1次－	弥生後期～室町期	溝状遺構 土壙	校舎増築	1993	『二丈中学校校内遺跡 I』1993
III	二丈中学校校内遺跡－第2次－	弥生中期～室町期	甕棺墓 溝状遺構 竪穴遺構	県道拡幅	1995	未報告
IV	二丈中学校校内遺跡－第3次－	弥生後期～室町期	竪穴式住居 木棺墓 溝状遺構	校舎増築	1997	『二丈中学校校内遺跡 II』2003
V	貝田遺跡	近世期	溝状遺構	県道拡幅	2002	未報告
VI	辻遺跡－第1次－	近世期	井戸 溝状遺構	県道拡幅	2002	未報告
VII	正覚寺境内遺跡	近世期	近世墓	御堂増築	2002	『正覚寺境内遺跡』2004
VIII	二丈中学校校内遺跡－第4次－	弥生後期～鎌倉期	甕棺墓 溝状遺構	グラウンド工事	2002	未報告
IX	辻遺跡－第2次－	鎌倉期～近世期	石組み井戸 溝状遺構	国道自歩道設置工事	2003	今回報告
X	辻遺跡－第3次－	近世期	土壙 溝状遺構	歯科医院建設	2004	未報告
XI	辻遺跡－第4次－	近世期	土壙 溝状遺構	コンビニ建設	2006	未報告
XII	辻遺跡－第5次－	弥生後期～近世期	甕棺墓 溝状遺構	国道自歩道設置工事	2007	今回報告
XIII	辻遺跡－第6次－	近世期	土壙 溝状遺構	眼科医院建設	2007	未報告

第1表 深江市街地 調査地点一覧



第3図 周辺地形図 (S=1/2,500)

### III. 調査の記録

#### 1. 辻遺跡第2次調査の概要（平成14年度調査）

調査地は国道202号「二丈町役場前」交差点を挟み、北側（第1トレンチ）と南側（第2トレンチ）とに分かれる。調査は第1トレンチ側から実施しており、国道と言う交通量が多い地点であるために調査区を囲むバリケード張りから行い、0.25のバックホールを用いての表土除去から開始した。その後、作業員を投入しての遺構検出作業に移ったが、第1トレンチの遺構面は黄褐色から黄白色を呈する砂層であり、標高では3.0mの高さを測った。また、南側から北側へと僅かに傾斜していることが確認され、状況より深江駅側から続く砂丘上に当たるものと考えられる。

第2トレンチの調査では、旧二丈町役場敷地内に当たるため、役場の用壁除去からバリケード張りを行い、バックホールにより表土除去、作業員による遺構検出の順に実施した。第1トレンチ同様、遺構面は黄褐色から黄白色を呈する砂層であり、標高はやや高く、3.1mを測った。

#### 2. 検出遺構

##### 第1トレンチ〔II-①〕（第5図）

県道大野城・二丈線と国道202号線の交差点「二丈町役場前」の北側、上り斜線側に設定したトレンチである。トレンチは国道202号線に沿って3m×14mに設定し、調査面積は42m<sup>2</sup>となる。

検出された遺構は柱穴状ピット、土壙、石組み井戸、溝状遺構、旧河川である。以下、順次説明を加える。

##### 柱穴状ピット群

調査区全域で検出されたピット群である。直径10cm～30cm、深さ20cm程度を測るものばかりであり、規律性もなく、建物跡となるかは定かではない。

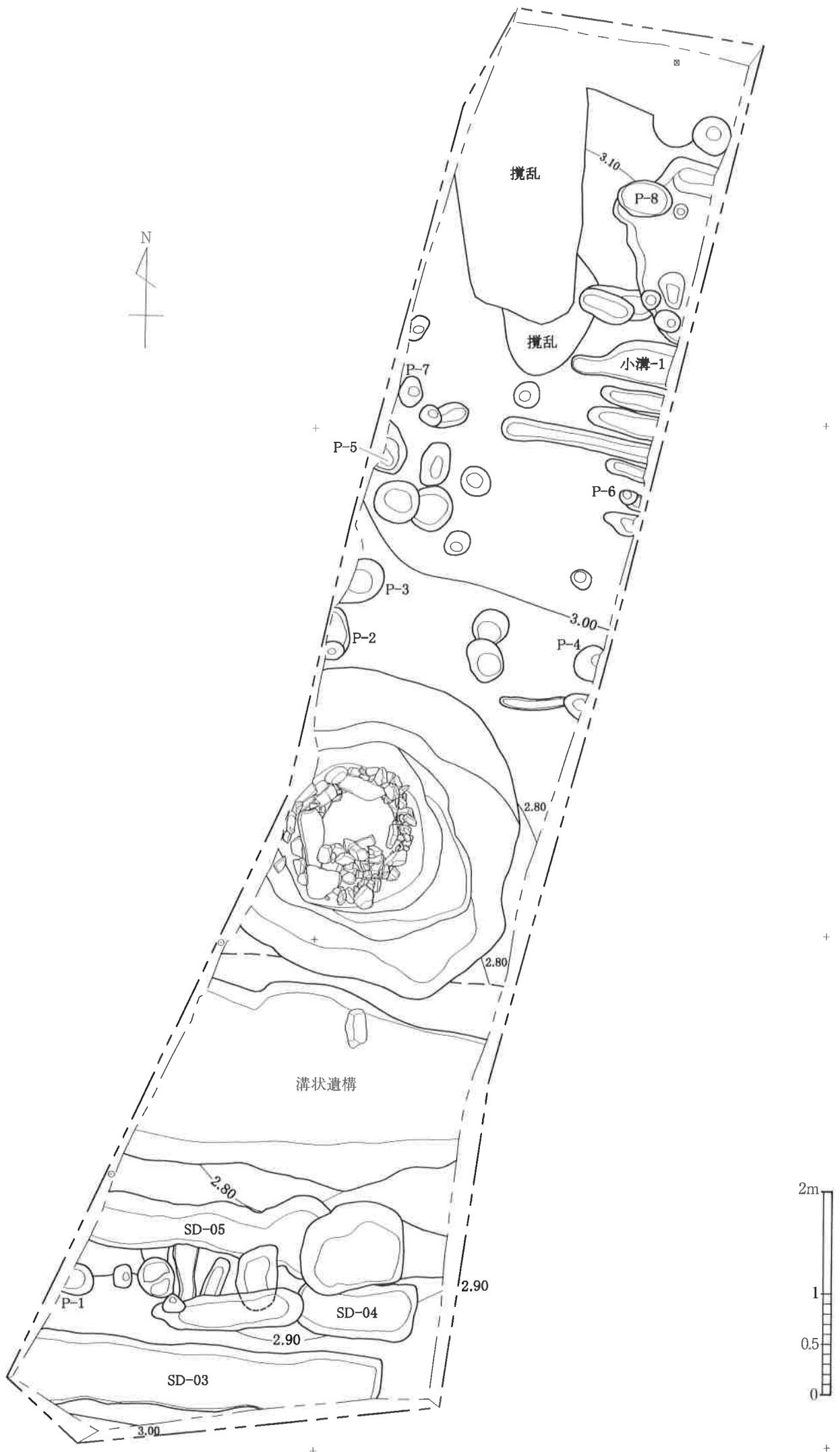
##### 石組み井戸（第6図）

II-①トレンチの中央部で検出した石組みの井戸である。掘り方の形状は東西に長い楕円形を呈し、長軸320cm×短軸300cmを測る。また、南北部側に作業床と考えられるテラス面を持っている。井戸の本体は掘り方の中央部に位置しており、二の腕～拳大の石を面を整えながら積み上げていた。内寸で62cm×68cm、高さ40cmを測る。

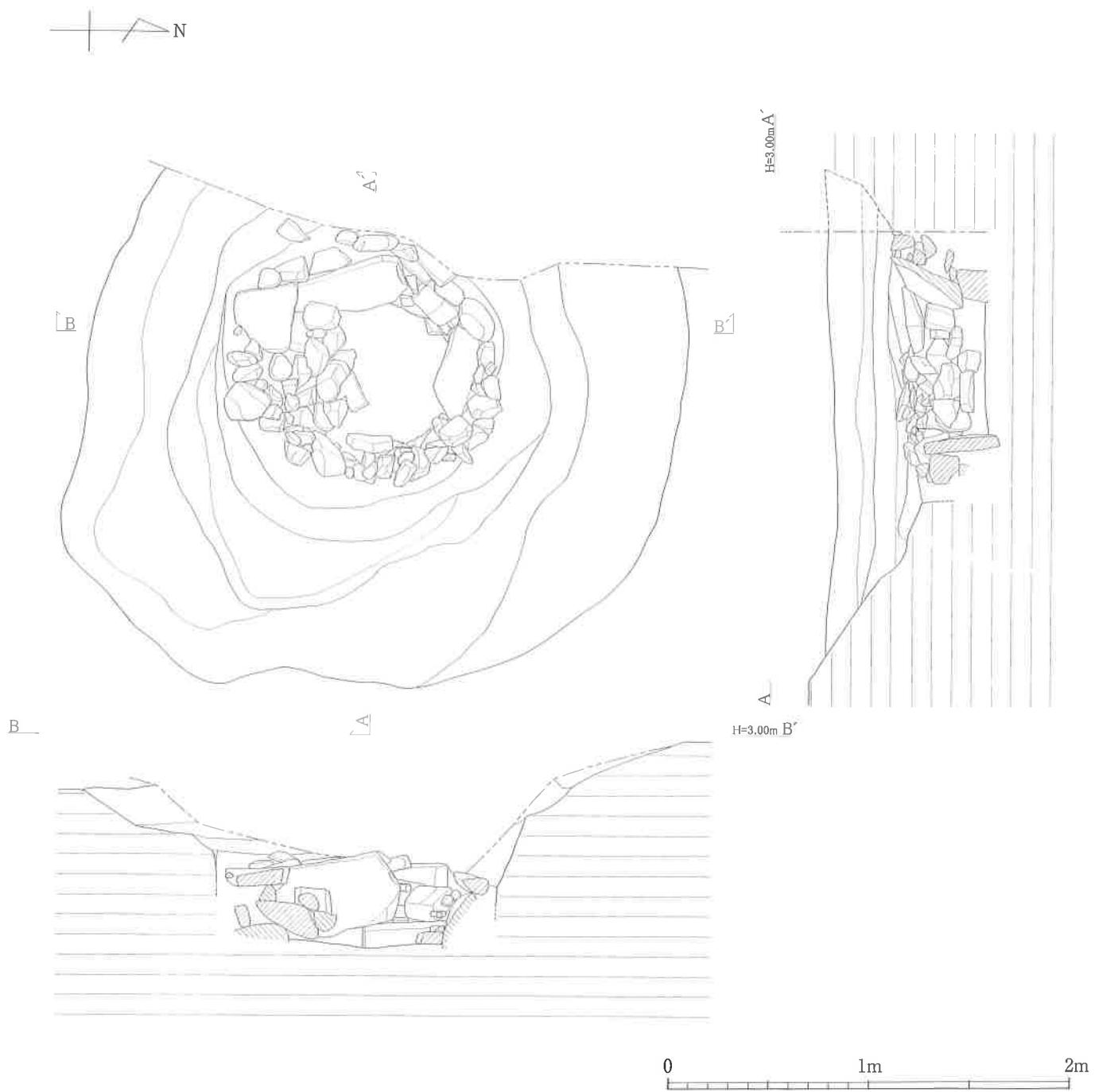
井戸内からは、土師質の甕形土器や瓦、北宋銭などが出土している。また、溝状遺構の北側肩部を切っており、溝内の出土土器などからみて、井戸自体は12世紀代のものと考えられよう。

##### 溝状遺構（第7図）

調査区中央部で検出したもので、東西方向へと流路をとる。北側肩部を石組み井戸に切られている。堆積状況は大きく3層に分かれ、第3層の黒色土内に遺物が集中していた。幅200cm、深さが62cmを測る。



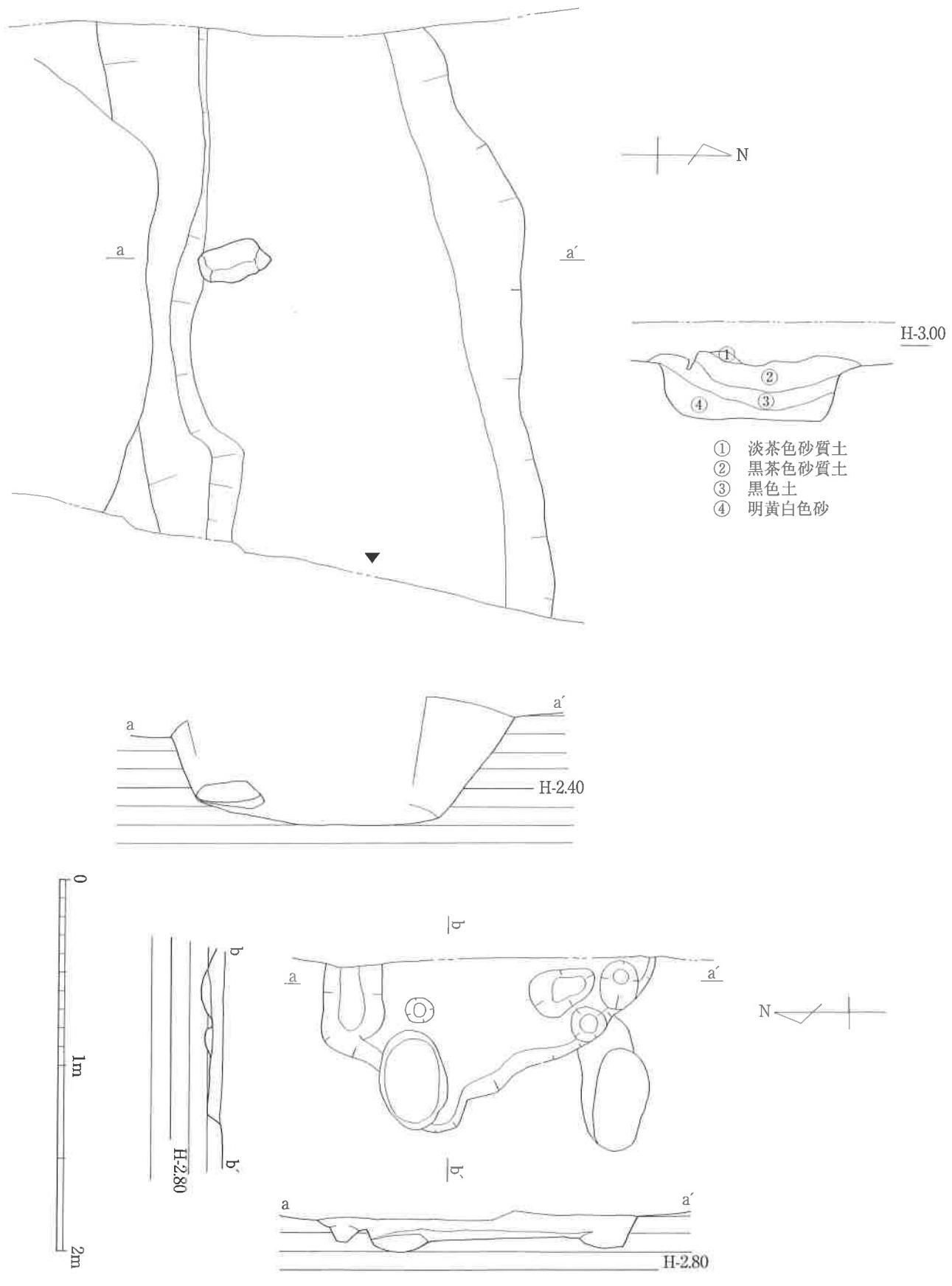
第5図 II-① 遺構配置図 ( $S=1/50$ )



第6図 II-① 石組み井戸実測図 ( $S=1/30$ )

#### 1号土壙（第7図）

調査区北東隅で検出した不整形の土壙である。東側半分が調査区外となり、全様は不明である。長軸172cm、深さ13cmを測る。



第7図 II-① 溝状遺構・1号土壤実測図 ( $S=1/30$ )

### 小溝遺構

トレンチ北側で検出した溝であり、調査区内より南北方向5本、東西方向2本の計7本を検出した。この外、調査区北端で6本の小規模な小溝を検出したが、畠の畝となる可能性が高い。

### 第2トレンチ〔II-②〕(第8図)

第1トレンチ南側に隣接して設定したトレンチであり、県道大野城・二丈線と国道202号線の交差点「二丈町役場前」の北側角に当たる。国道の形状に沿って3.2m×7.2mに設けたため、調査面積は、23m<sup>2</sup>となった。

### 2号土壙(第9図)

調査区中央部、西寄りで検出した長楕円形の土壙である。長軸101cm×短軸62cm、深さ29cmを測る。

### 3号土壙(第9図)

調査区中央部、東寄りで検出した土壙である。北側部分を現代井戸により切られている。形状は不整形を呈し、東西隅に掘り込みがある。長軸142cm×短軸122cm、深さ30cmを測る。

### 4号土壙(第9図)

調査区北部、西寄りで検出した土壙である。南北方向へ伸びる小溝を切っている。形状は不整形を呈し、中央部に掘り込みがある。長軸120cm×短軸90cm、深さ34cmを測る。

### 5号土壙(第9図)

調査区中央部、西寄りで検出した長楕円形を呈する土壙であり、南北方向へ伸びる小溝を切っている。長軸110cm×短軸70cm、深さ38cmを測る。

### 6号土壙(第9図)

調査区南部、西側で検出した土壙である。西側半分が調査区外となり、全様は不明である。東側隅に直径20cmほどのピットがある。長軸86cm、深さ22cmを測る。

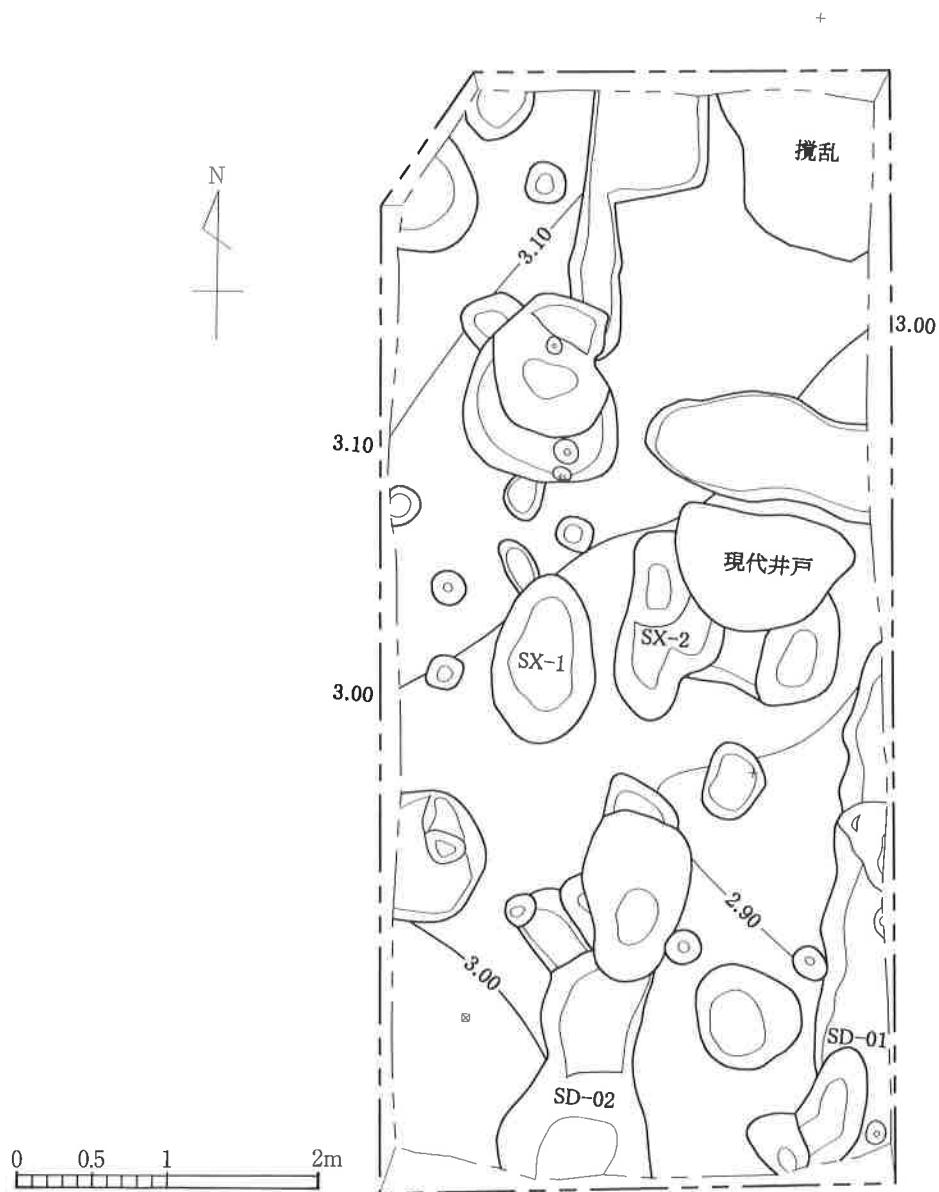
### 第3トレンチ〔II-③〕(第10図)

「二丈町役場前」交差点の南側、下り斜線側に設定したトレンチであり、旧二丈町役場敷地内に当たる。トレンチは3.5m×30mに設定し、調査面積は105m<sup>2</sup>となった。

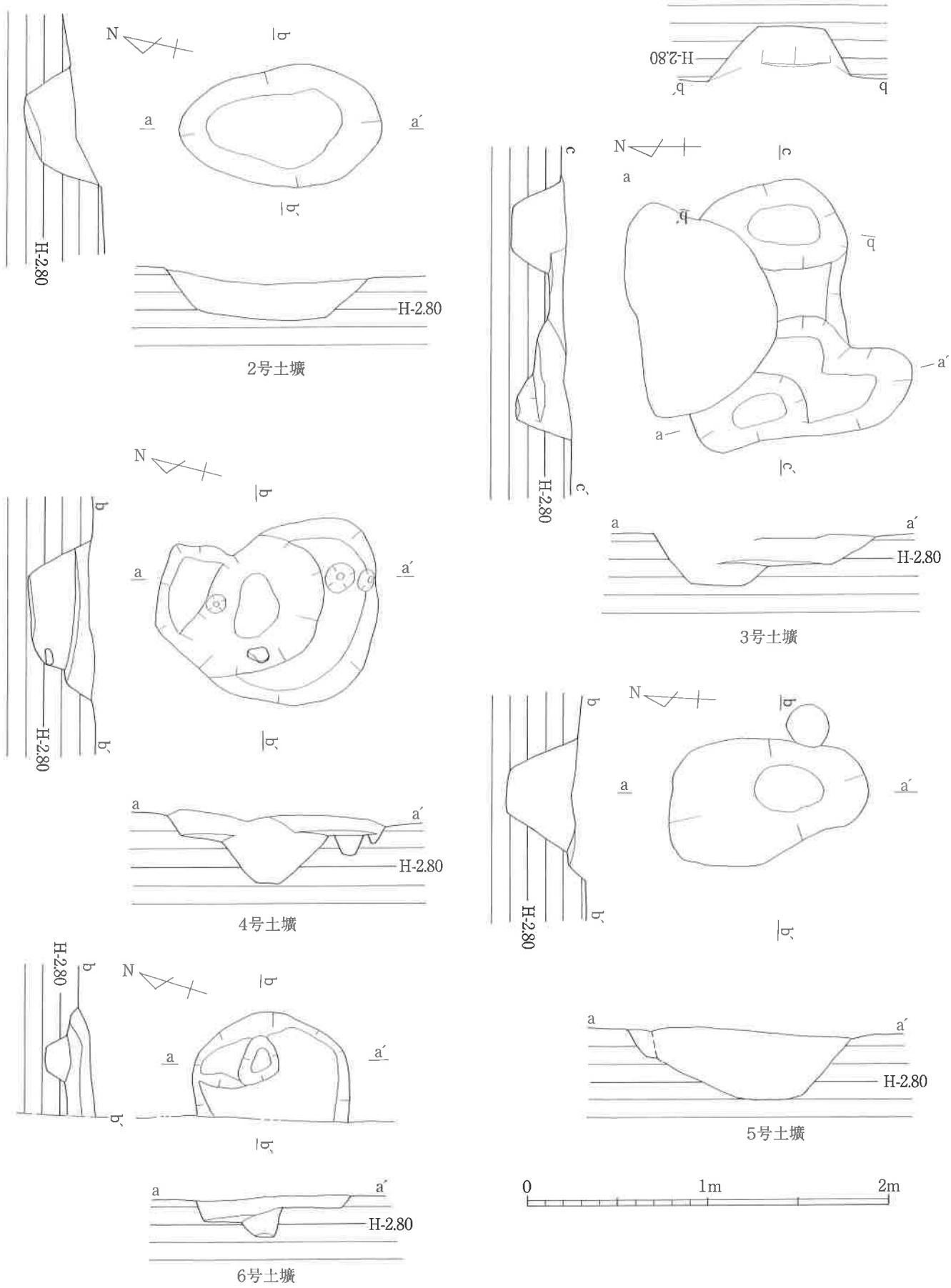
検出された遺構は柱穴上ピット、溝状遺構などである。順次、説明を加える。

#### 柱穴状ピット

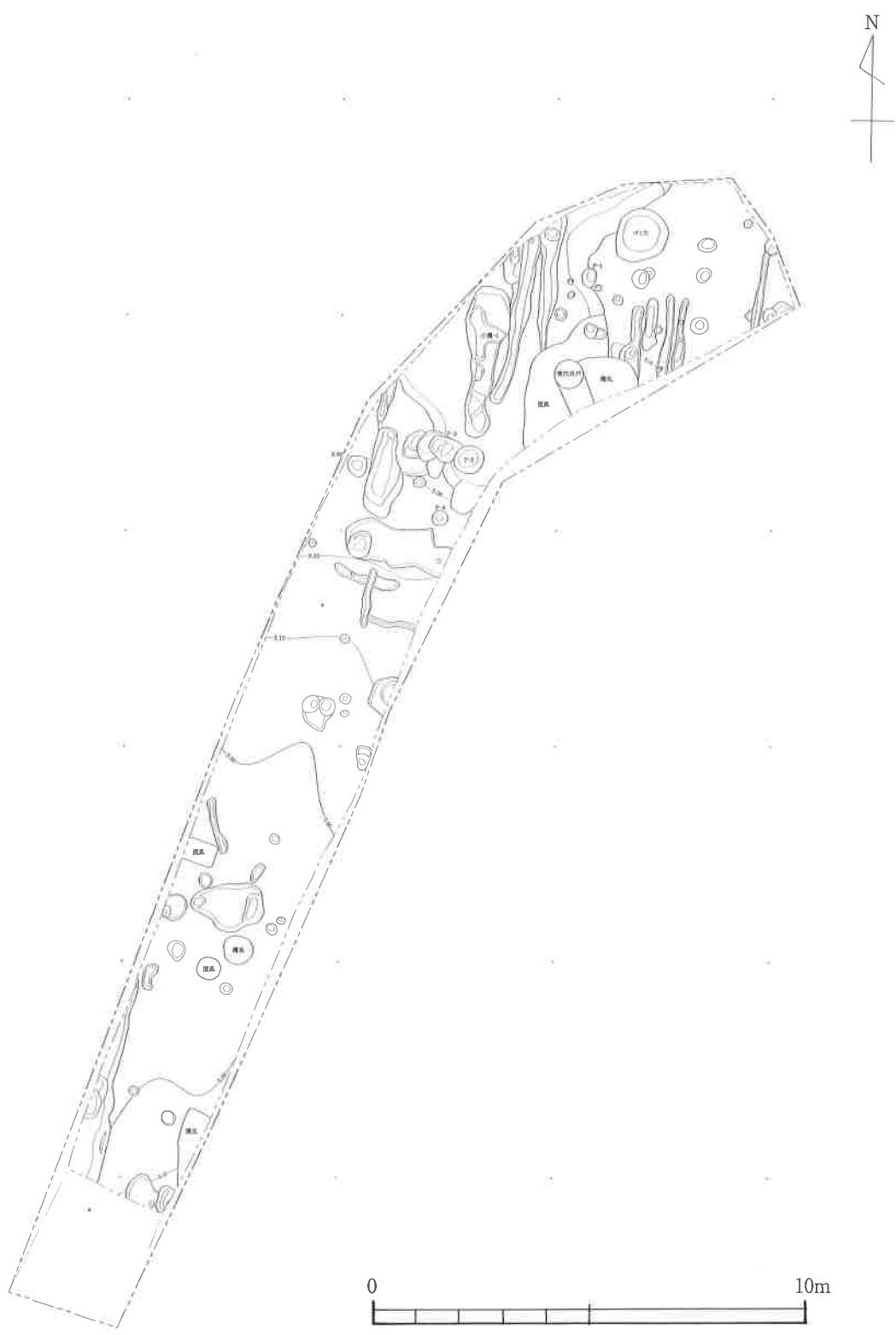
調査区全域で検出されたピット群である。直径10cm～30cm、深さ20cm程度を測る小規模なものばかりであり、規律性も認められない。



第8図 II-② 遺構配置図 ( $S=1/50$ )



第9図 2号・3号・4号・5号・6号 土壌実測図 ( $S=1/30$ )



第10図 II-③ 遺構配置図 ( $S=1/150$ )

### 7号土壙（第11図）

調査区南側、中央部で検出した長楕円形を呈する土壙である。長軸170cm×短軸110cm、深さ26cmを測る。

### 8号土壙（第11図）

調査区中央部、東側で検出した隅丸方形の土壙である。東側半分が調査区外となり、全様は不明である。

### 1号溝状遺構（第11図）

調査区中央部、北寄りで検出したもので、北東隅に直径64cmのピットを付す。東西方向に軸をとるが、東側は調査区外へと伸びる。幅90cm、深さ10cmを測る。

### 2号溝状遺構（第11図）

調査区北部、中央寄りで検出したものである。東側が太く、西側が細くなる。長さ350m、幅52cm、深さ22cmを測る。

### 小溝遺構

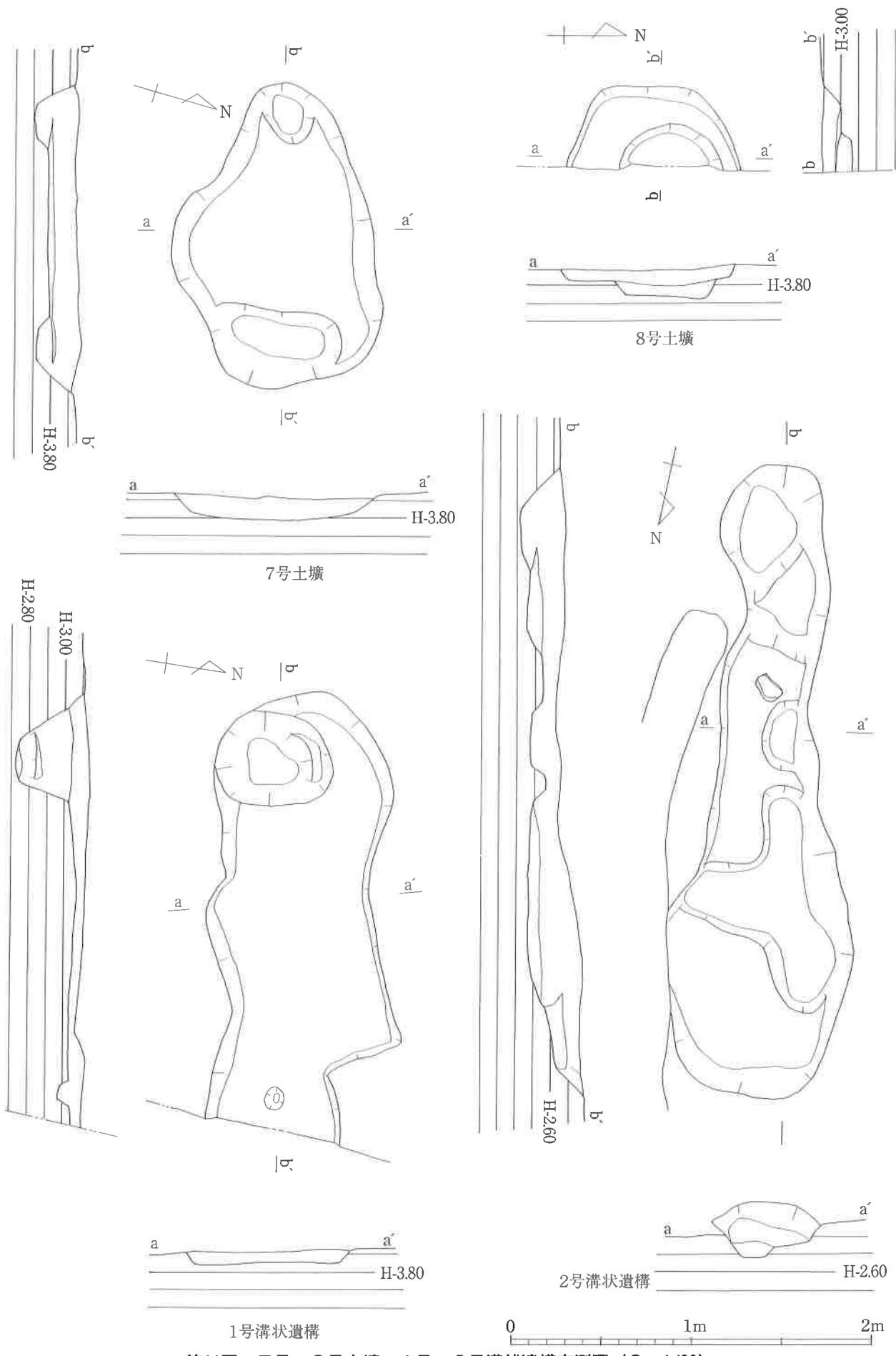
第3トレンチの全域で検出された幅15cm、深さ5cmほどの小溝である。7本ほど検出しているが、全て南北方向をとる。畠の畝となる可能性が高い。

### 落ち込み

第2トレンチ北東隅については、傾斜変換線をもって40cmほどの高低差が生じている。また、土色も黒色に変色しており、水浸していたことも考えられる。

### 現代のゴミ穴

段差下で検出したゴミ穴であり、3箇所で検出している。遺物としては近現代の陶器を中心にガラスの薬剤瓶や昭和初期のビール瓶、七輪などといったもので近世民俗資料と成り得るもののが多数出土しており、上位面より、掘り込まれていたものであろう。



第11図 7号・8号土壤、1号・2号溝状遺構実測図 ( $S=1/30$ )

### 3. 出土遺物（第12図～第18図）

1～26は第1トレンチ、27～32は第2トレンチ、33～73は第3トレンチ出土の遺物である。

#### 第1トレンチ（II-①）遺構出土遺物（第12図）

1はP-1とした小ピットより出土した土師皿である。内外面ナデ調整を施し、底部は糸切りとなる。色調は暗茶褐色、胎土には微砂粒を含み、焼成は不良である。復元により底部径6.6cmを測る。

2は1号溝状遺構より出土した土師皿である。外面板ナデ、内面ナデ調整を施し、底部は糸切りとなる。色調は暗黄白色、胎土には微砂粒を含み、焼成は良である。復元により底部径8.0cmを測る。

3は小溝より出土した土師皿である。内外面ナデ調整を施し、底部は糸切りとなる。色調は茶褐色、胎土には微砂粒を含み、焼成は良である。復元により底部径6.6cmを測る。

4は3号溝状遺構より出土した土師質の大皿である。器壁が厚く、口縁端部は平坦面を持つ。内外面板ナデを施し、外面には煤状の付着物がある。色調は暗茶色、胎土には微砂粒を含み、焼成は良である。復元により、器高4.5cm、口縁部径32.0cm、底部径29.0cmを測る。

5は石組み井戸の掘り方内より出土した土師皿である。内外面ナデ調整を施し、底部は糸切りとなる。色調は茶褐色、胎土には砂粒を若干含み、焼成は良である。復元により、器高2.9cm、口縁部径12.6cm、底部径7.2cmを測る。

6は1号溝状遺構より出土した土師皿である。外面板ナデ、内面ナデ調整を施し、底部は糸切りとなる。色調は暗茶褐色、胎土には微砂粒を含み、焼成は良である。復元により底部径6.6cmを測る。

7は小溝より出土した土師質の土器である。胴部の中位と考えられ、垂れ気味の三角突帯が付く。色調は淡灰色、胎土に微砂粒を僅かに含み、焼成は良である。

8は1号溝状遺構より出土した磁器碗である。目込み部に重ね焼きの痕跡が残る。色調はくすんだ乳白色を呈し、精良な粘土を使用しており、焼成は良好となる。高台部径6.0cmを測る。

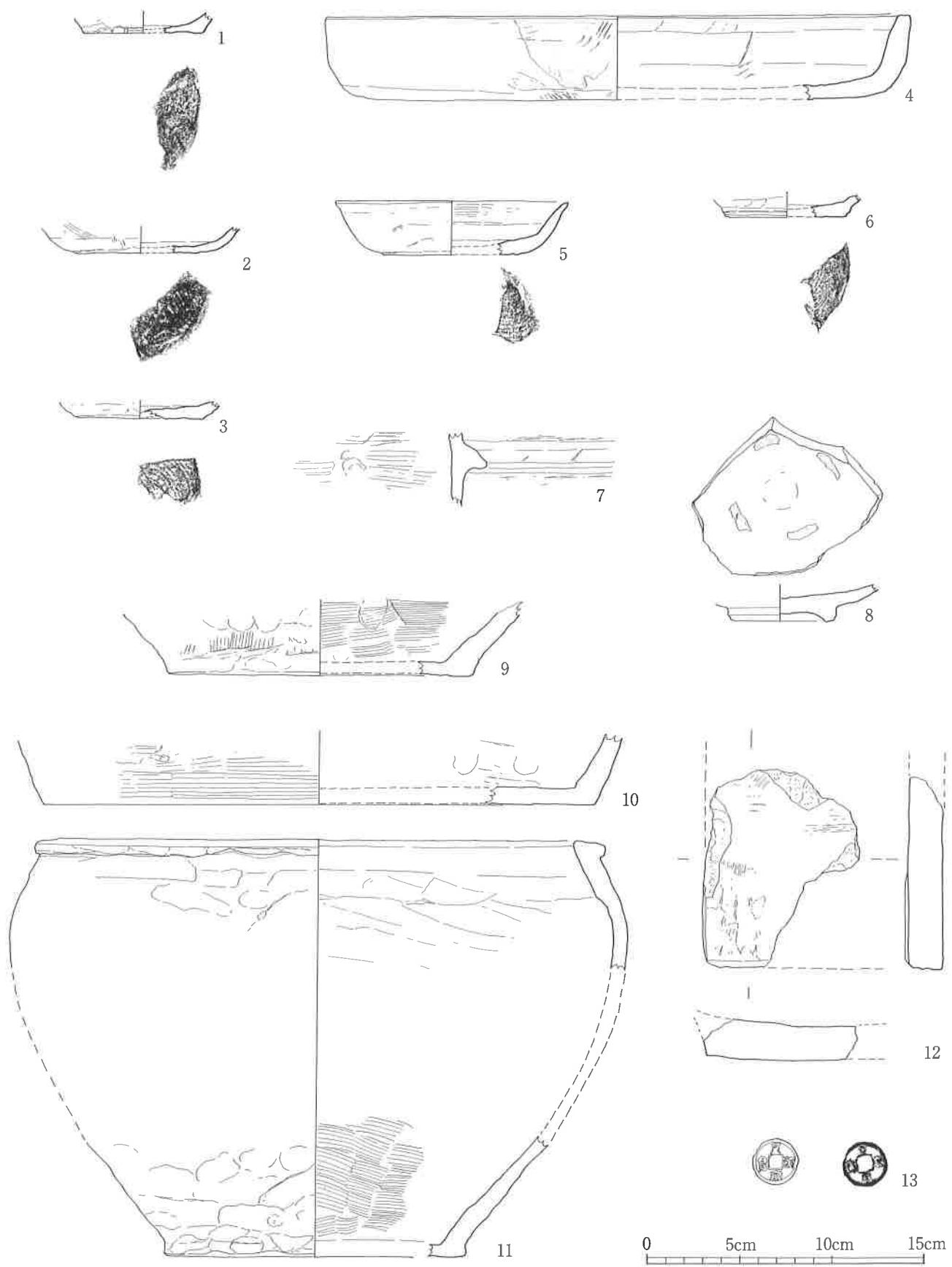
9は石組み井戸の掘り方内より出土した瓦質の甕底部である。平底の底部から直線的に外へ開く。外面ハケ調整後ナデ調整、内面は横方向へのハケ調整を施す。色調は黒灰色、胎土には砂粒を若干含み、焼成は良となる。復元により底部径16.4cmを測る。

10も掘り方内より出土した甕の底部である。平底の底部から直線的に外へ開く。外面横方向へのハケ調整、内面はナデ調整を施す。色調は暗小豆色、胎土には砂粒を含み、焼成は良となる。復元により底部径30.0cmを測る。

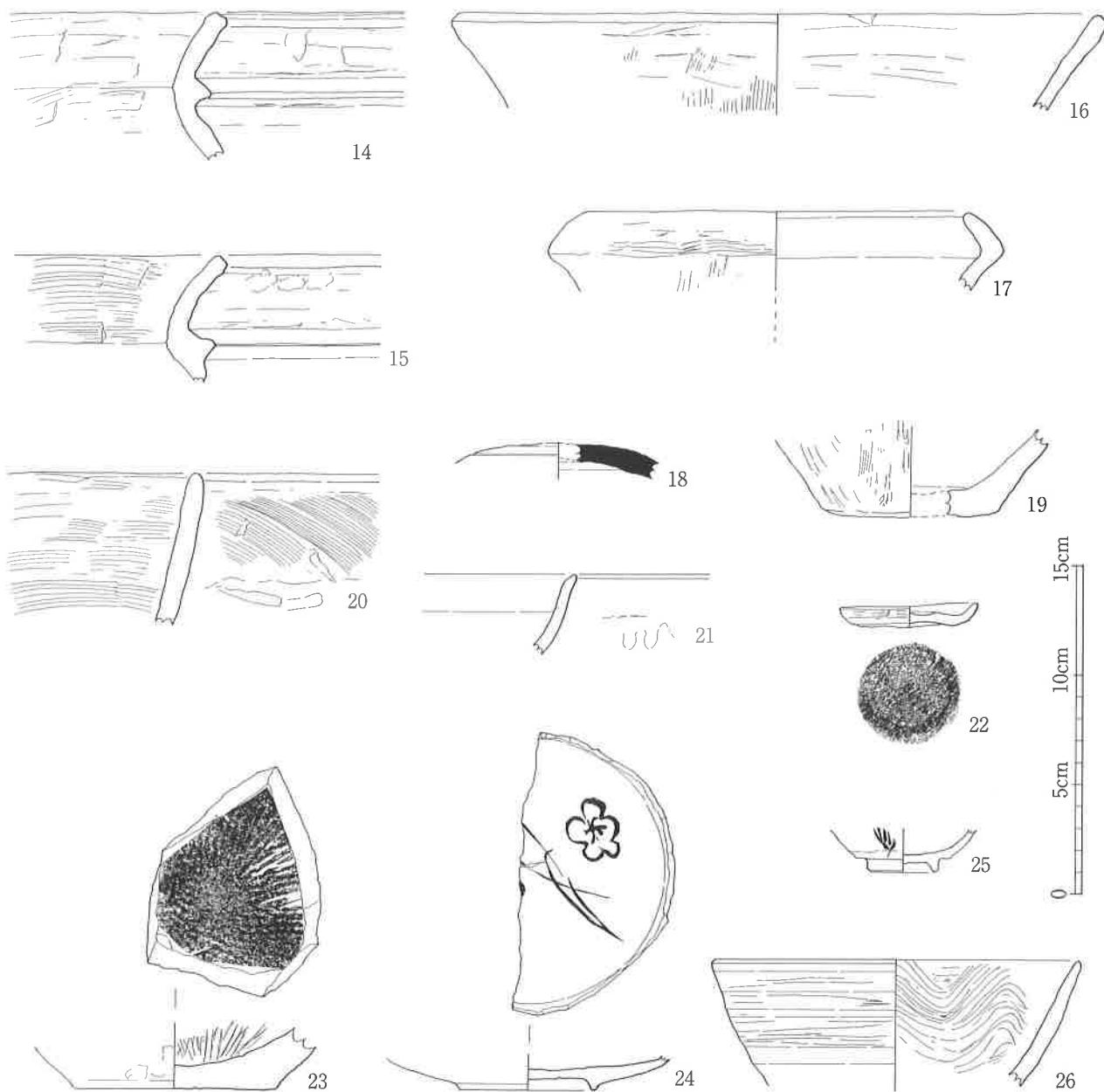
11は石組み井戸より出土した土師質の甕である。2片であるが、同一固体と考えられる。平底の底部から外上方へ伸び、胴部は丸みを持つ。口縁部作り出されている。外面強いナデ調整を施し、内面下位はハケ調整、上位はケズリ調整が施される。色調は淡茶色、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良となる。復元により、器高22.6cm、口縁部径30.8cm、底部径16.2cmを測る。

12は井戸より出土した瓦である。色調は明茶色、胎土には砂粒を含み、焼成は良である。

13は井戸より出土した銅錢である。北宋の仁宗が寶元元年（1038年）に鑄た「皇宋通宝」であり、篆書体で表わす。渡来量が多い銅錢であり、寶元年間後の康定～慶曆年間まで引き続き造られたも



第12図 II-① 出土遺物実測図 (S=1/3)



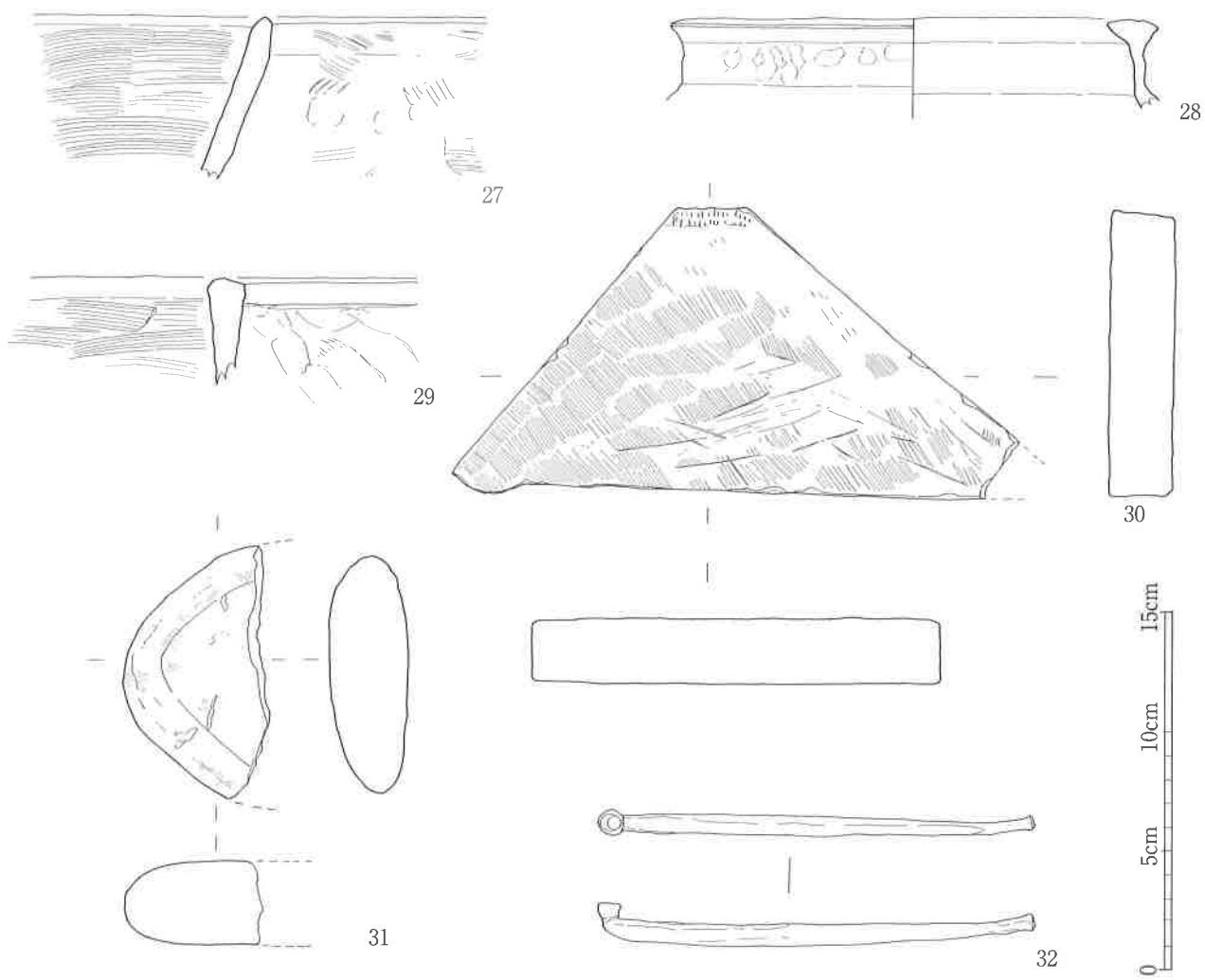
第13図 II-① 遺構検出面出土遺物実測図 ( $S=1/3$ )

のであろう。直径2.4cm。

#### 第1トレンチ (II-①) 遺構検出面出土遺物 (第13図)

14は遺構面直上より出土した弥生後期の甕形土器である。頸部にやや垂れ気味の三角突帯を付す。内外面ナデ調整。色調は暗茶褐色、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。

15は石組み井戸の埋土より出土した弥生後期の甕形土器である。14と同形であるが、突帯が上がり気味となる。外面ナデ調整、内面ハケ調整を施す。色調は暗茶褐色、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。



第14図 II-② 出土遺物実測図 ( $S=1/3$ )

16は遺構面直上より出土した広口壺の口縁部片である。外面ハケ調整後ナデ調整、内面はナデ調整を施す。色調は明黄褐色、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。復元により口縁部径29.6cmを測る。

17は遺構面直上より出土した袋状口縁壺である。外面ハケ調整後ナデ調整を施し、内面は丁寧なナデ調整を施す。色調は暗茶褐色、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。復元により、口縁部径17.6cmを測る。

18は須恵器蓋の破片資料である。外面回転ヘラケズリを施す。色調は暗灰色、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

19は弥生土器の底部片である。平底の感じは薄れ、レンズ底となる。外面粗いハケ調整、内面ナデ調整を施す。色調は黒茶色、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。復元により、底部径8.2cmを測る。

20は大型の鉢形土器口縁部片。胴部から口縁部へと直線的に開く。外面ハケ調整、内面ナデ調整を施す。外面下半に煤が付着している。色調は暗黄色、胎土には微砂粒を含み、焼成は良好である。

21は青磁碗の口縁部片。色調は淡緑色、胎土には微砂粒を含み、焼成は良である。

22は遺構面直上で出土した土師皿。小皿であり、底部は糸切りとなる。内外面ナデ調整を施す。色調は茶褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。焼成は良好である。器高1.1cm、口縁部径6.4cm、底部径4.2cmを測る。

23は擂鉢の底部。平底の底部から上外方へ伸び、胴部は丸みをもつ。内面に放射線状の溝を刻む。色調は暗小豆色、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。復元により底部径9.4cmを測る。

24は近世磁器の皿。高台は低い。見込み部に桜と枝を描く。色調は淡黄緑色、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。底部径6.2cmを測る。

25は陶器の酒杯。色調は黄白色、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。底部径3.2cmを測る。

26は近世陶器の椀。外面強いナデ調整を施す。色調は淡茶色、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。復元により口縁部径16.8cmを測る。

## 第2トレンチ〔II-②〕出土遺物（第14図）

27は溝状遺構より出土した土師質の鉢形土器。胴部から口縁部にかけて直線的に開くもので、外面には煤が付着する。外面ハケ調整後ナデ調整、内面はナデ調整である。色調は黒色、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

28は小型の近世甕口縁部片。頸部は短く立ち上がり、T字状の口縁部へと至る。内外面ナデ調整を施す。色調は小豆色、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

29は検出面出土の土器である。鉢であろうか。外面ナデ調整により丁寧に面取りを行い、内面はハケ調整を施す。色調は淡茶色、胎土には砂粒を含み、焼成は良である。

30は台形状の石製品である。表裏ともに丁寧に整形され、加工痕が顕著に残る。長さ11.8cm、幅は上辺で3.4cm、下辺は現状で22.4cm、厚さ2.7cmを測る。滑石製。

31は磨き石。半分を欠損する。幅10.4cm、厚さ3.4cmを測る。花崗岩製。

32は煙管である。吸い口から全て銅の一鑄造りとなる。長さ18.5cmを測る。

## 第3トレンチ〔II-③〕出土遺物（第15図）

33は第3トレンチ西側部の落ち込みより出土した土鈴である。頂点は摘み状に尖り、7mm程の孔を通す。外面に縦、横の墨線を描く。色調は淡黄白色を呈し、現状で高さ5.3cm、幅6.3cmを測る。同形のものが、志摩町大峠遺跡より出土している。

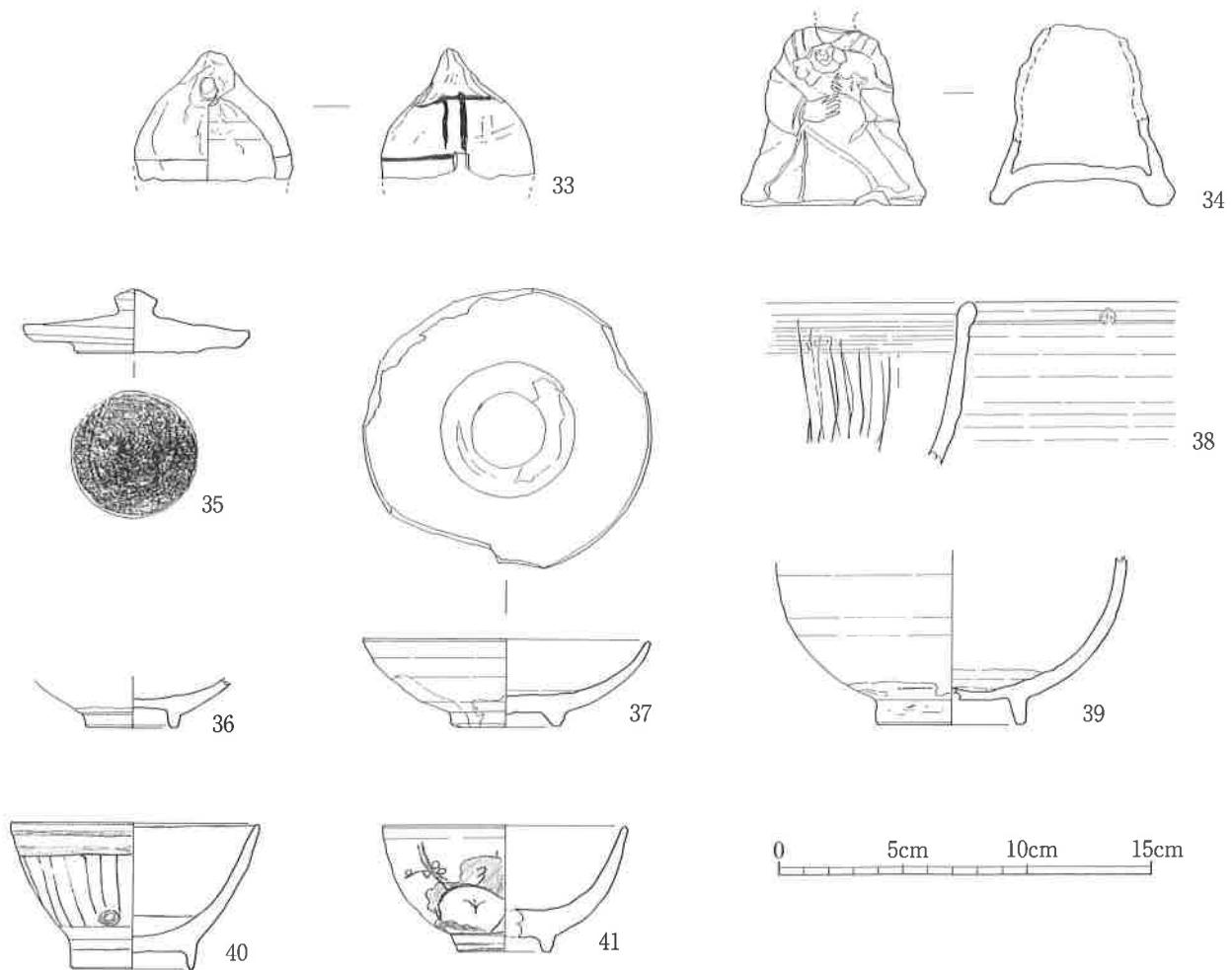
34は土製人形。型作りであり、中空となる。顔を欠損しているが、和装で子犬を抱いている姿を表現している。色調は淡黄白色。

35は遺構検出面出土。摘み部が宝珠形となる陶器の蓋で、底面は糸切りとなる。色調は暗山吹色、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。器高2.6cm、口縁部径9.2cmを測る。

36は小型の磁器椀。色調は淡黄緑色、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。高台部径3.8cmを測る。

37も磁器椀。見込み部の釉が輪状に欠き取られる。色調は白色で、内側に淡緑色の釉をかける。器高3.6cm、口縁部径11.6cm、高台部径4.8cmを測る。

38は擂鉢。胴部は丸みをもち、口縁端部は丸く収める。内面に放射線状の刻みを入れる。色調は茶鉛色、胎土には砂粒を僅かに含み、焼成は良好である。



第15図 II-③ 出土遺物実測図-1 ( $S=1/3$ )

39は体部が深い磁器椀。胴部は丸みをおびる。色調は黒色で、深緑色の釉をかける。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。高台部径6.2cmを測る。

40は染付け椀である。高台が高く、胴部が直線的に開く。器高5.9cm、口縁部径10.0cm、高台部径4.8cmを測る。

41も染付け椀であり、胴部は丸みを持つ。外面に梅枝と梅花が描かれる。復元により、器高5.2cm、口縁部径9.8cm、高台部径4.0cmを測る。

### 第3 トレンチ (II - ③) 出土民俗資料 (第16図～第18図)

42～73は、3箇所のゴミ穴から出土したものであるが、昭和初期の民俗文化財としての好資料となるため、報告しておきたい。

42～46は博多素焼きの七輪である。旧博多の瓦町皿山地区で焼かれていたもので、瓦町焼きとも呼称される素焼き製品である。同製品は昭和初期を中心にして博多を始め、周辺の広い地域で用いられており、旧博多町の商人と周辺の町、村との交易を示す資料と言える。

42は胴中位より下を欠損する。口縁部上端に金網を乗せるための突起が3箇所付けられている。胴中位に扇状の押印があるが、文字は読み取れない。窯名もしくは検印が記されていたものであろう。色調は淡黄褐色を呈し、口縁部径21.2cmを測る。

43は胴上位の破片資料である。内外面、丁寧に工具によるナデ調整を施す。色調は淡黄褐色を呈し、復元により口縁部径20.0cmを測る。

44は口縁部を欠損している、接地部が波状となる。胴下位に4.0cm×14.0cmの送風窓を開ける。また、送風窓の横には長円の押印が認められる。色調は淡黄褐色を呈し、接地部径22.0cmを測る。

45も同様のものである。色調は淡黄褐色を呈し、接地部径21.0cmを測る。

46は送風窓がないため、背面となるものであろう。上位、下位に針金が巻きつけてある。色調は淡黄褐色を呈し、接地部径20.0cmを測る。

47は送風窓の蓋である。中央部に摘みを付ける。色調は淡黄褐色を呈す。

48も小型品。外面に針金が巻かれ、内面には煤が付着する。色調は淡黄褐色を呈し、口縁部径10.4cmを測る。

49は磁器の小皿。器高4.2cm、口縁部径12.4cm、底部径5.6cmを測る。

50は徳利である。桜花、花びらの浮文を付け、胴中央部に【凱旋記念】と記される。器高さ15.0cm、口縁部径2.4cm、底部径5.0cmを測る。

51は角徳利。高砂が書きこまれ、祝宴事に使用されたものであろう。器高13.3cm、口縁部径2.6cm、底部径4.0cmを測る。

52は磁器製の茶碗。雪文の染付けがある。器高5.6cm、口縁部径11.2cm、底部径3.8cmを測る。

53も磁器製の茶碗。竹鳥が染め付けられる。器高6.5cm、口縁部径10.6cm、底部径3.6cmを測る。

54は磁器製の湯飲み茶碗。斜線文が染め付けられる。器高5.0cm、口縁部径7.8cm、底部径3.2cmを測る。

55も磁器製の湯飲み茶碗である。草花文が染め付けられる。器高5.0cm、口縁部径8.2cm、底部径3.0cmを測る。

56はプラスチック製の万年筆である。本体部分に【BUNMEISHA TOKYO】と刻印されている。キャップまでの長さ12.6cmを測る。

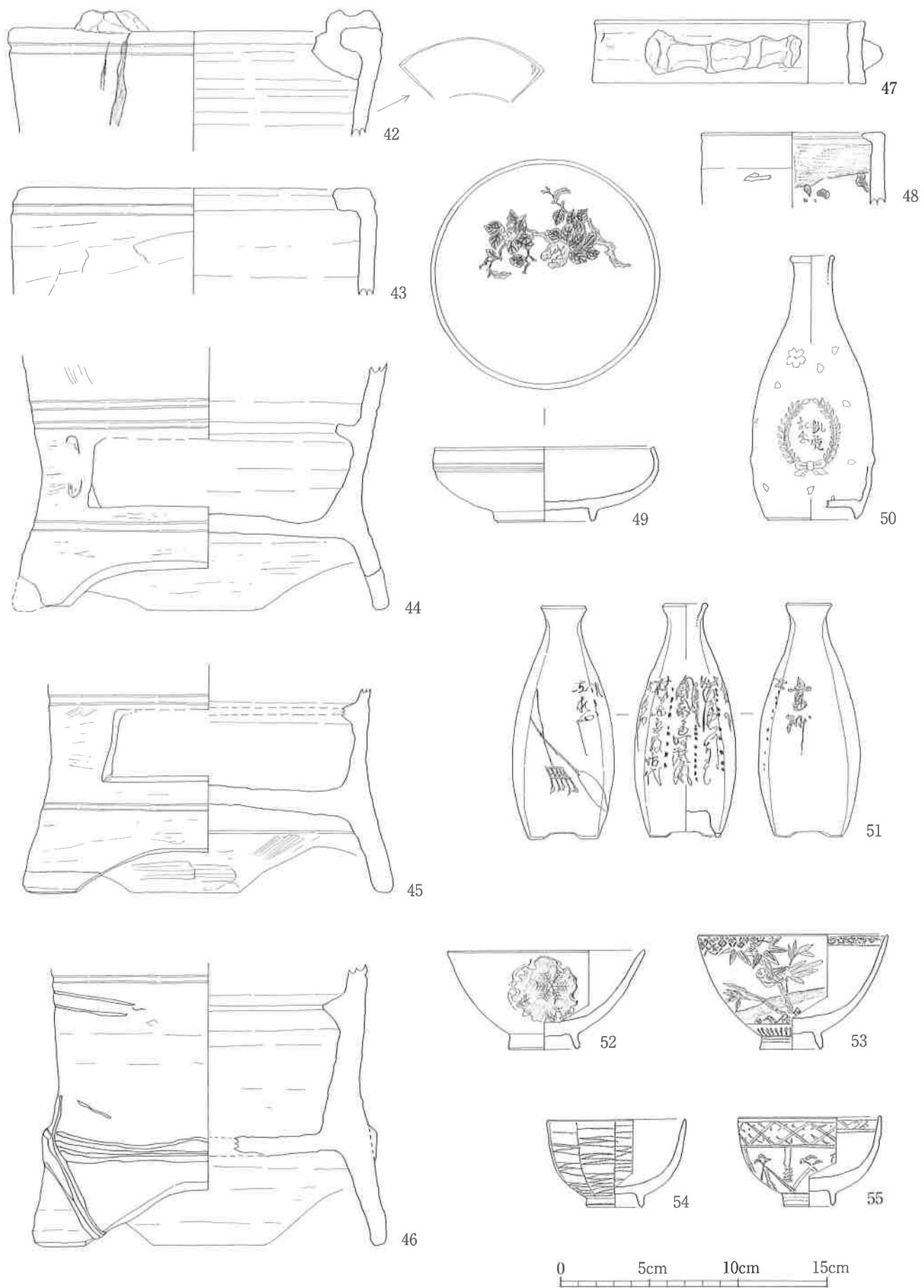
57はガラス製の注射器。本体、棒部とも完存している。本体部に5、10の目盛りが刻まれる。全長11.8cmを測る。

58は歯ブラシである。握り部に【JJオイル No8 15】と刻印されている。全長12.4cmを測る。

59はプラスチック製の髪結い櫛。全長13.1cmを測る。

60はガラス容器であり、栓はコルク栓となるものである。

表には「るり羽」という商品名、裏には「定量」と刻印されている。同商品は1894年創業の【山發



第16図 II-③ 出土遺物実測図-2 (S=1/3)



第17図 II-③ 出土遺物実測図-3 (S=1/3)

商店】(山発産業株式会社)の白髪染め薬品であり、1911年より販売されている。色調は無色透明である。器高7.1cm、口縁部径1.5cm、底部径2.8cmを測る。

61も同種であるが、裏の刻印が「容定」となる。色調は無色透明である。器高7.0cm、口縁部径1.5cm、底部径2.8cmを測る。

62も同種であるが、ガラスの色調がアメ色透明となり、中にコルク栓が入る。器高7.1cm、口縁部径1.5cm、底部径2.8cmを測る。

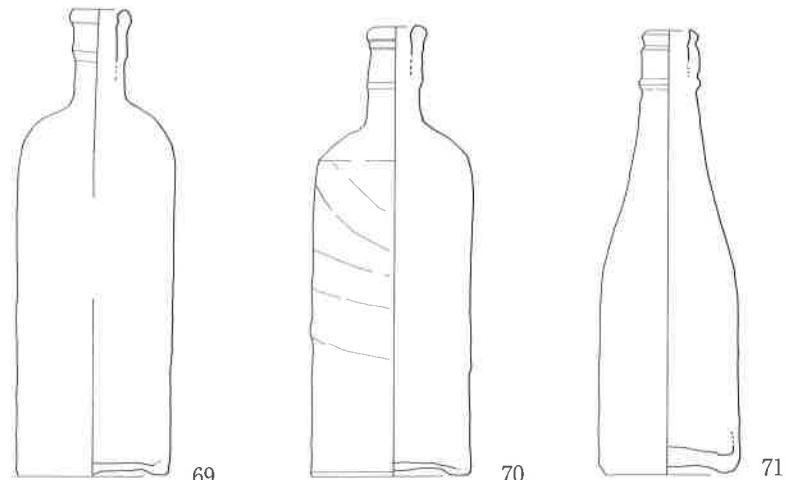
63はガラス容器であり、表に「西海目薬」という商品名、裏に「西海製剤合資會社」と企業名が刻印されている。昭和初期、九州における製薬業の中心地は佐賀県の肥前地域であるため、名称よりみて同地に構えた会社と考えられ、九州を中心に販路を持った製品となろう。色調はコバルトブルー、中にコルク栓が入る。器高7.0cm、口縁部径1.5cm、底部3.2cm×1.8cmを測る。

64は「キューピーコールド液」と商品名が刻印される。

キャップ式の口縁となる。色調は無色透明である。器高8.9cm、口縁部径1.0cm、底部は5.5cm×2.5cmを測る。

65は「Romance Cold」という商品名が刻印される。キャップ式の口縁となる。色調は無色透明。器高8.7cm、口縁部径1.2cm、底部5.8cm×3.0cmを測る。

66は「Biyman」という商品名が刻印される。Biyman(ビーマン)は昭和2年創業の有限会社共同製薬所の白髪染め薬品であり、昭和14年、お歯黒式白髪染め商品として販売している。色調は茶色の半透明。器高9.2cm、口縁部径1.8cm、底部4.4cm×2.4cmを測る。



第18図 II-③ 出土遺物実測図-4 (S=1/3)

67はイカリソース社のガラス瓶であり、「IKARI SAUCE CO.LTD」と刻印される。器高240cm、口縁部径2.5cm、底部径6.0cmを測る。

68はガラス瓶。色調は無色透明である。器高さ23.0cm、口縁部径2.9cm、底部径5.4cmを測る。

69はガラス瓶。色調はアメ色透明を呈す。器高18.6cm、口縁部径2.4cm、底部径6.0cmを測る。

70はガラス瓶。黄緑色透明を呈す。器高17.9cm、口縁部径2.4cm、底部径6.2cmを測る。

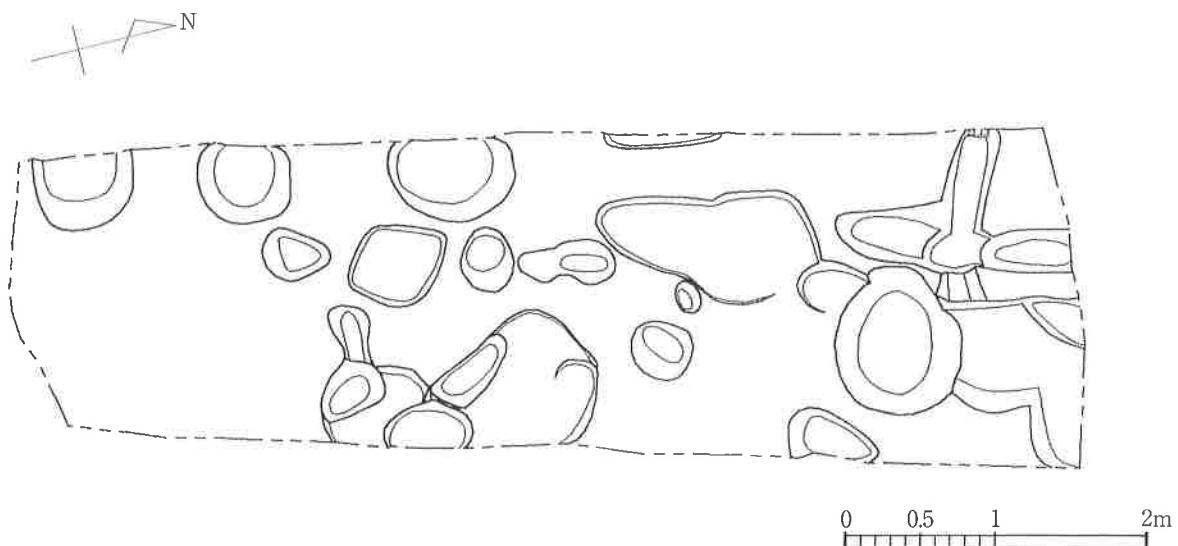
71はガラス瓶。アメ色透明を呈す。器高17.7cm、口縁部径2.4cm、底部径5.0cmを測る。

72は桜麦酒社のビール瓶。大正元年に設立された帝国麦酒会社が翌、大正2年にサクラビールの販売を開始している。また、昭和4年に社名を桜麦酒（ビール）社と変更しており、同商品も昭和18年まで製造されていたとされる。色調は茶色半透明。器高28.8cm、口縁部径2.4cm、底部径6.0cmを測る。

73はビール瓶。体下部に【大日本麦酒株式会社製】と刻される。大日本麦酒株式会社は1906年、大阪麦酒（アサヒビールの前身）、日本麦酒（エビスビール）、札幌麦酒（サッポロビールの前身）が合併して誕生したもので、戦後の1949年に財閥解体に伴い、朝日麦酒（ビール）と日本麦酒（ビール）とに分割された。このため、同製品はこの間に製造されたものと考えられる。色調は茶色半透明を呈する。器高22.5cm、口縁部径2.5cm、底部径6.0cmを測る。

II -③トレンチのゴミ穴より出土した遺物は、概ね、昭和初期から20年代のものである。日常用器や雑器、嗜好品をピックアップして報告してみたが、徳利の出土数が最も多く、祝宴が行われたものと判断できる。また「凱旋記念」銘の徳利を見ても、当時の世相が反映されており、興味深いものである。

こうした日常品については、たまに路傍でみつけることもあるが、現代では流通しておらず、近代の記憶として記録すべきものであろう。



第19図 V-① 遺構配置図 (S=1/50)

#### 4. 辻遺跡第5次調査の概要（平成18年度調査）

調査地は、平成14年度調査地（辻遺跡第2次調査）の西側延長部分にあたり、平成18年度に試掘を行った個人宅地前を第1トレンチとして発掘を行い、平成14年度に試掘が終了し、甕棺墓が検出されていた、「深江駅前」交差点に接する果樹園内を第2トレンチとして発掘調査を実施した。

自歩道設置工事の延長部としては、第2次調査地点との接合部や第2トレンチとの接合部の試掘も行う予定であったが、日常生活の面や工事の工程を考慮して立会に変更、遺構が検出されなかつたため、調査区としては設定していない。

順次、説明を加えたい。

##### 第1トレンチ〔V-①〕（第19図）

第1トレンチとした調査区は民家の玄関先に当たるため、住人の方の生活を考慮して2m×7mの調査区のみを設定した。また、調査地が庭に当たるため、植樹による遺構面の損傷が激しく、数個の柱穴状ピットが検出できただけであった。

##### 柱穴状ピット群

直径60cm以上のものは現代の植樹穴であり、その周囲で検出した直径10cm～40cm、深さ20cm程を測るものからは土器片が出土している。調査区が狭く、建物となるかは定かではない。

## 5. 出土遺物

74はP-1より出土した甕形土器の口縁部片。内外面ハケ調整を施す。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には微砂粒を含む。焼成は良好である。弥生後期後半の時期といえる。

75はP-3より出土した甕形土器の口縁部片。内面ハケ調整、外面ナデ調整を施す。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には微砂粒を含む。焼成は良好である。弥生後期後半の時期であろう。

76はP-2より出土した瓦質の土器である。口縁は上端で平坦面を持つ。擂鉢であろうか。色調は黒色、胎土には砂粒を僅かに含む。焼成は不良である。

77は1号溝とした小溝より出土した土師皿の碎片である。底部に糸切りの痕跡が残る。色調は明茶褐色、胎土には微砂粒を若干含む。焼成はやや不良である。復元により、底部径5.6cmを測る。

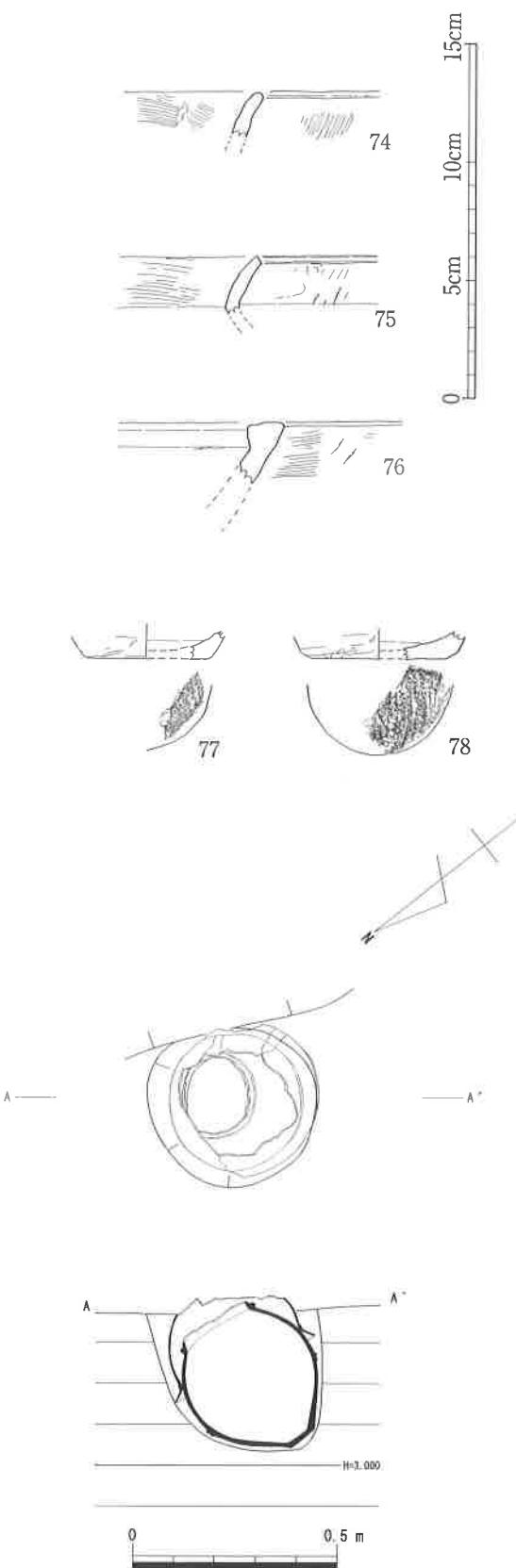
78は4号溝とした小溝より出土した土師皿片である。底部には糸切りの痕跡が残る。色調は暗茶褐色、胎土には微砂粒を含む。焼成は良である。復元により、底部径5.8cmを測る。

### 第2トレンチ [V-②] (第23図)

第2トレンチとした調査区は、国道202号線『深江駅前』交差点に隣接する果樹園内であり、平成14年度の試掘調査において弥生後期の小児棺が検出されていた。

これまでの市街地調査、特に第2砂丘上においては弥生土器の散布は認められていたが、明確な遺構は検出されておらず、今回、甕棺墓が検出された点は予想外であった。これにより、弥生期の遺構の広がりについては再検討しなければならないが、本調査区である果樹園はなお、同一レベルで南側に広がるため、複数の甕棺墓が存在する可能性が高く、今後の調査に期待が持てる。

第2トレンチとした調査区は2m×18mに設定し、甕棺墓の外、柱穴状ピット、近世の畠と



第22図 V-② 甕棺墓実測図 (S=1/20)

考えられる小溝などが検出されている。順次、説明を加える。

#### 溝状遺構

調査区全域で検出された東西方向に伸びる幅40cmほどの小規模な溝状遺構である。

#### 柱穴状ピット群

直径5cm～30cm、深さ20cm程を測るもので、建物となるかは定かではない。

#### 甕棺墓（第22図）

調査区中央部で検出した合せ口式の甕棺墓である。墓壙は39cm×42cm、深さ34cmを測り、主軸はN-38°-Eをとる。上棺は鉢形土器、下甕には口縁部を打ち欠いた甕形土器を使い、その規模より小児棺と考えられる。

#### 上甕（第24図）

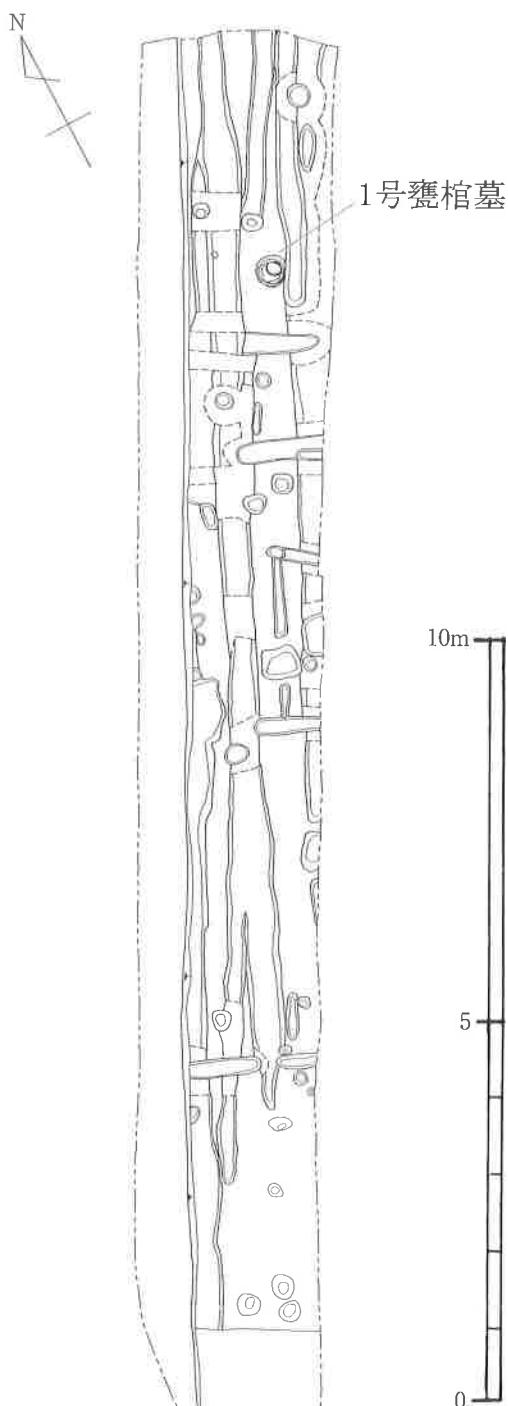
上甕として使用されていたのは、鉢形土器である。胴部は丸みをおび、頸部に1条の三角突帯を巡る。底部は平底となる。調整は内外面ハケ調整を施し、色調は淡茶褐色、胎土には微砂粒を若干含む。焼成は良好である。器高25.2cm、口縁部径35.5cm、底部径7.1cmを測る。

#### 下甕（第24図）

下甕として使用されていたのは、頸部以上が打ち欠かれた甕形土器である。

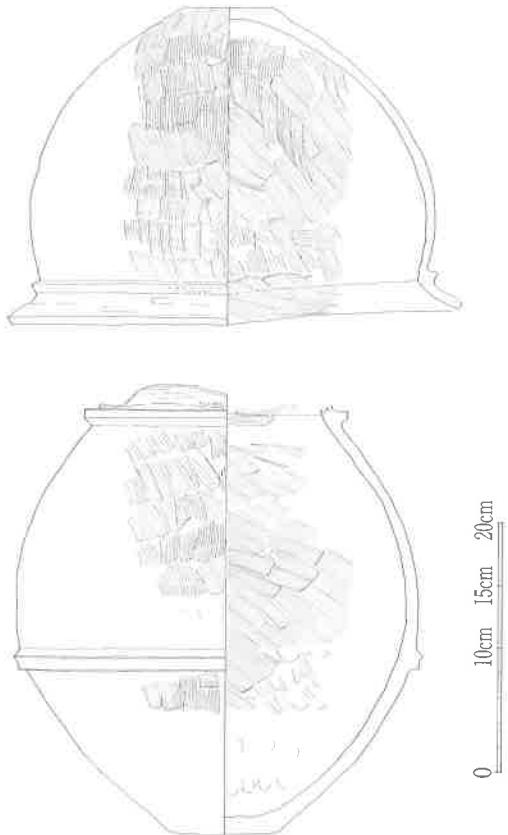
胴部は卵形を呈し、レンズ状の底部が付く。突帯は頸部と胴部中位に1条が巡らされ、形状はコの字状を呈す。調整は内外面ハケ調整を施すが、下位はナデ消されている。色調は明茶褐色、胎土には微砂粒を多く含み、焼成は良好である。器高は頸部まで35.7cm、底部径9.0cmを測る。

V-②より出土した甕棺墓は、弥生後期代



第23図 V-② 遺構配置図 (S=1/100)

に多く見られる小児棺の形態と言える。これらは日常土器の転用棺であり、通常は下甕として使用する甕もしくは複合口縁壺の頸部以上を打ち欠いて使用するものであり、大型専用棺としての北部九州の甕棺葬が基本的に終焉する弥生後期前半以降に認められる葬送法と言えよう。また、本遺跡より西方に位置する福井地区の冬切遺跡や番所遺跡、吉井地区の吉井浜遺跡といった砂丘上の遺跡での出土例が多くあり、今後、深江地区でもかなりの類例が増える可能性が高いと言えよう。



第24図 V-② 甕棺実測図 ( $S=1/6$ )

## IV. 調査のまとめ

本遺跡は、国道202号線の自歩道設置工事に伴うため、南北に長い調査地となった。検出された遺構を時代毎にみると弥生時代後期の甕棺墓、中世期の石組み井戸、溝状遺構、土壙、近世期、現代の土壙と幅広く、同地区の歴史を考える上でも新たな発見といえる。

Ⅱ項の位置と環境でも述べたが、同地域はこれまで古代の遺構は存在せず、近世期以降に宿場町縁辺部として発達したものと考えられていた。しかしながら、今回の調査において弥生後期の甕棺墓が出土したことにより、深江平野の全域において弥生の遺構が広がることが裏付けられ、今後、同地域における調査には慎重を期する必要がある。また、中世期の石組み井戸を中心とした土壙群の確認は深江町の成り立ちを考える上で貴重な調査成果であり、唐津街道成立以前の姿を垣間見る結果となった。

出土遺物については甕棺以外でも弥生後期の土器片が細見され、近隣に集落が存在する可能性が高い。また、土師皿の出土も多く、今後、中世期の集落の全様が確認されれば、より深江町並みの発達形態が解明できるであろう。この他、昭和初期の生活用具の出土についても特筆できるものであり、戦後の急速な近代化に伴い、一気に失われていった生活様式の記憶として貴重な遺物と言えよう。

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	ふかえ つじいせき
書 名	深江辻遺跡
副 書 名	二丈町文化財調査報告書
卷 次	第41集
シリーズ名	一般国道202号線自歩道設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	
編 著 者 名	古川秀幸
編 集 機 関	二丈町教育委員会
所 在 地	福岡県糸島郡二丈町大字深江1360
発 行 年 月 日	2008年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
深江 辻遺跡	福岡県 糸島郡 二丈町 大字深江 字辻	4 6		33° 30' 52"	130° 08' 30"	021102 ～ 030317 060410 ～ 070519	220m <sup>2</sup>	道 路	
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
	集 落 墳	弥生時代後期 ～ 近 現 代		石組み井戸 柱穴状ピット 甕 棺 墓		土師皿 近世陶器 弥生土器			

# 写 真 図 版





第2次調査地全景（真上より）



第2次調査地全景（北側より）

写真図版－2



II-① 全景（真上より）



II-② 全景（真上より）



石組み井戸全景（真上より）

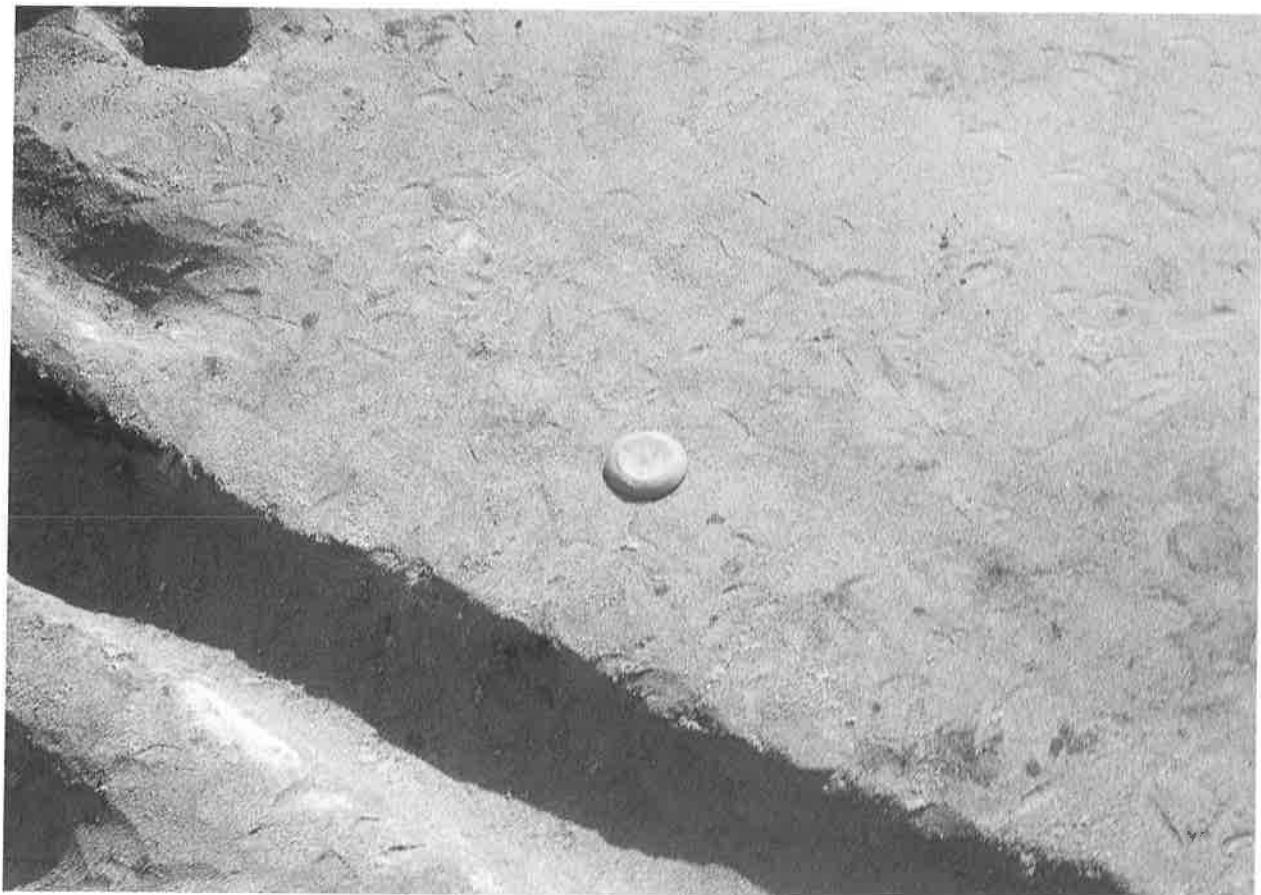


石組み井戸全景（東側より）

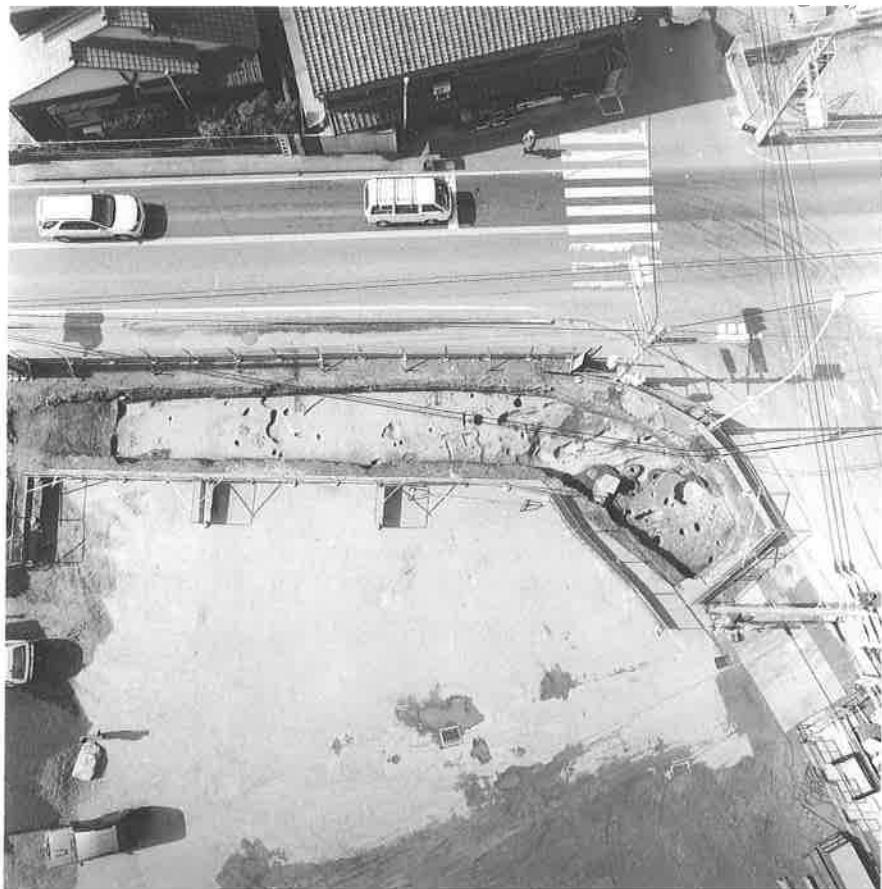
写真図版－4



溝状遺構全景（東側より）



土師皿検出状況



II-③ 全景（真上より）

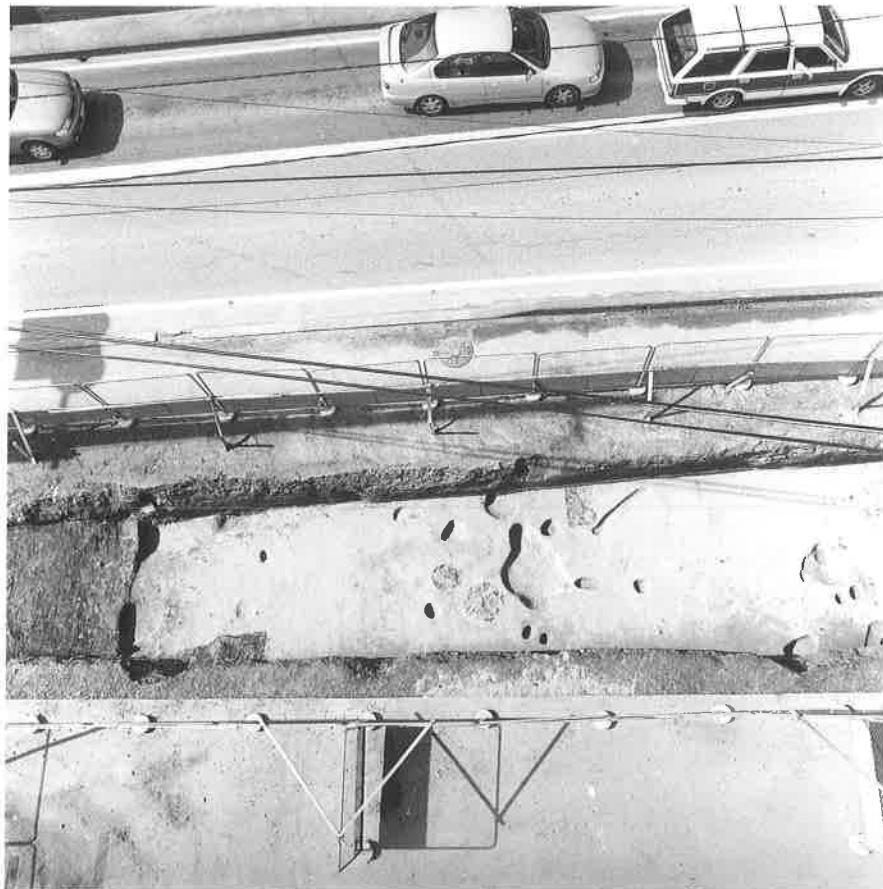


II-③ 全景（南側より）

写真図版-6



II-③ 北半全景（真上より）



II-③ 南半全景（真上より）



II-③ ピット検出状況



II-③ 溝状遺構検出状況

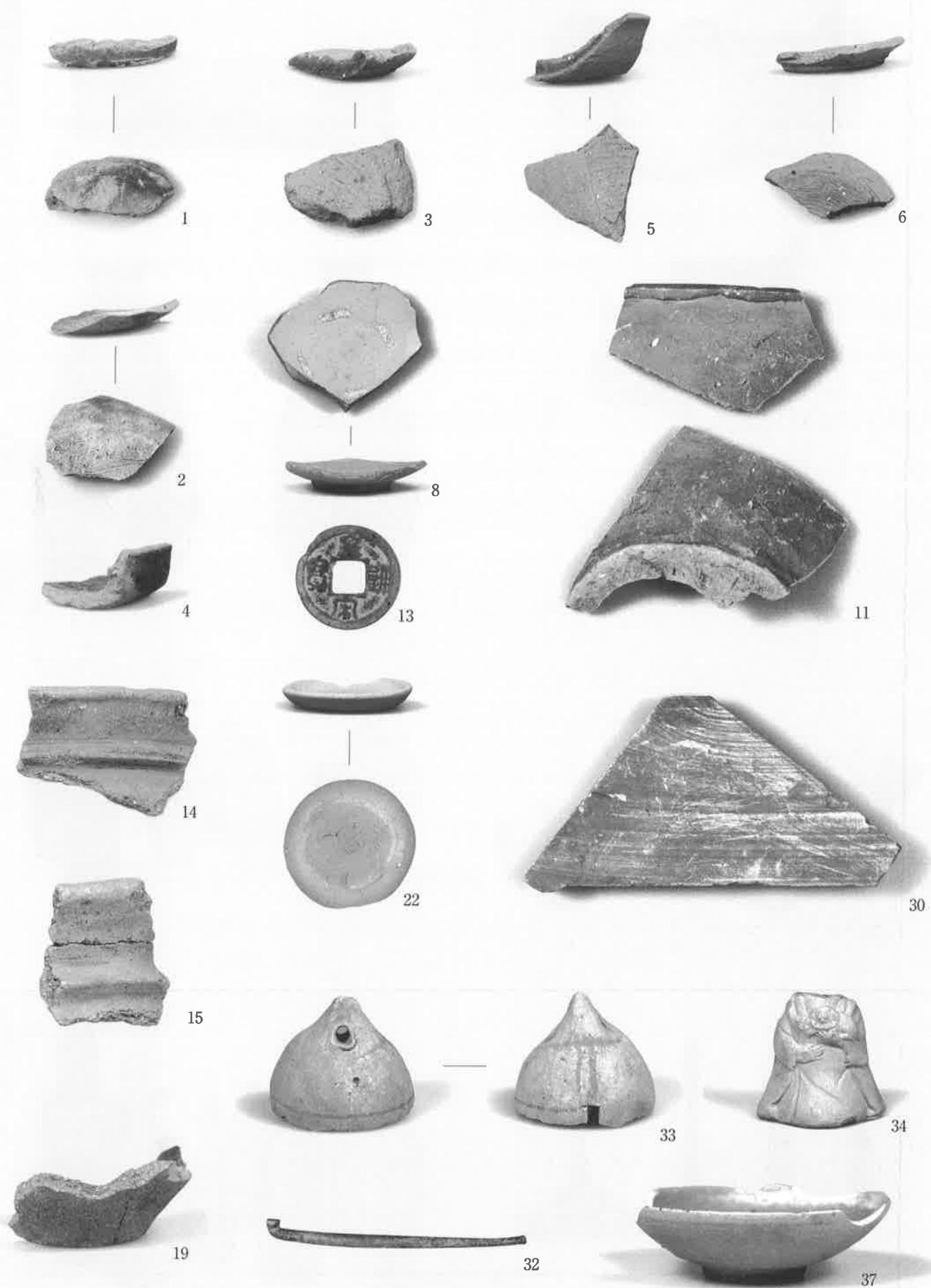
写真図版－8



土鈴出土状況



土鈴出土状況（拡大）



第2次調査出土遺物 1

写真図版-10



42



47



44



45



50



51



52~55



60~66



56~59



67~73



第5次調査 V-① 全景（北側より）



第5次調査 V-① 全景（南側より）

写真図版-12



V-② 全景（真上より）



V-② 全景（南側より）



V-② 遺構検出状況（真上より）



V-② 遺構検出状況（北側より）

写真図版-14



壺棺墓出土状況（南側より）



壺棺

# 深江辻遺跡

福岡県糸島郡二丈町大字深江所在遺跡の調査報告

二丈町文化財調査報告書

第41集

平成20年3月31日

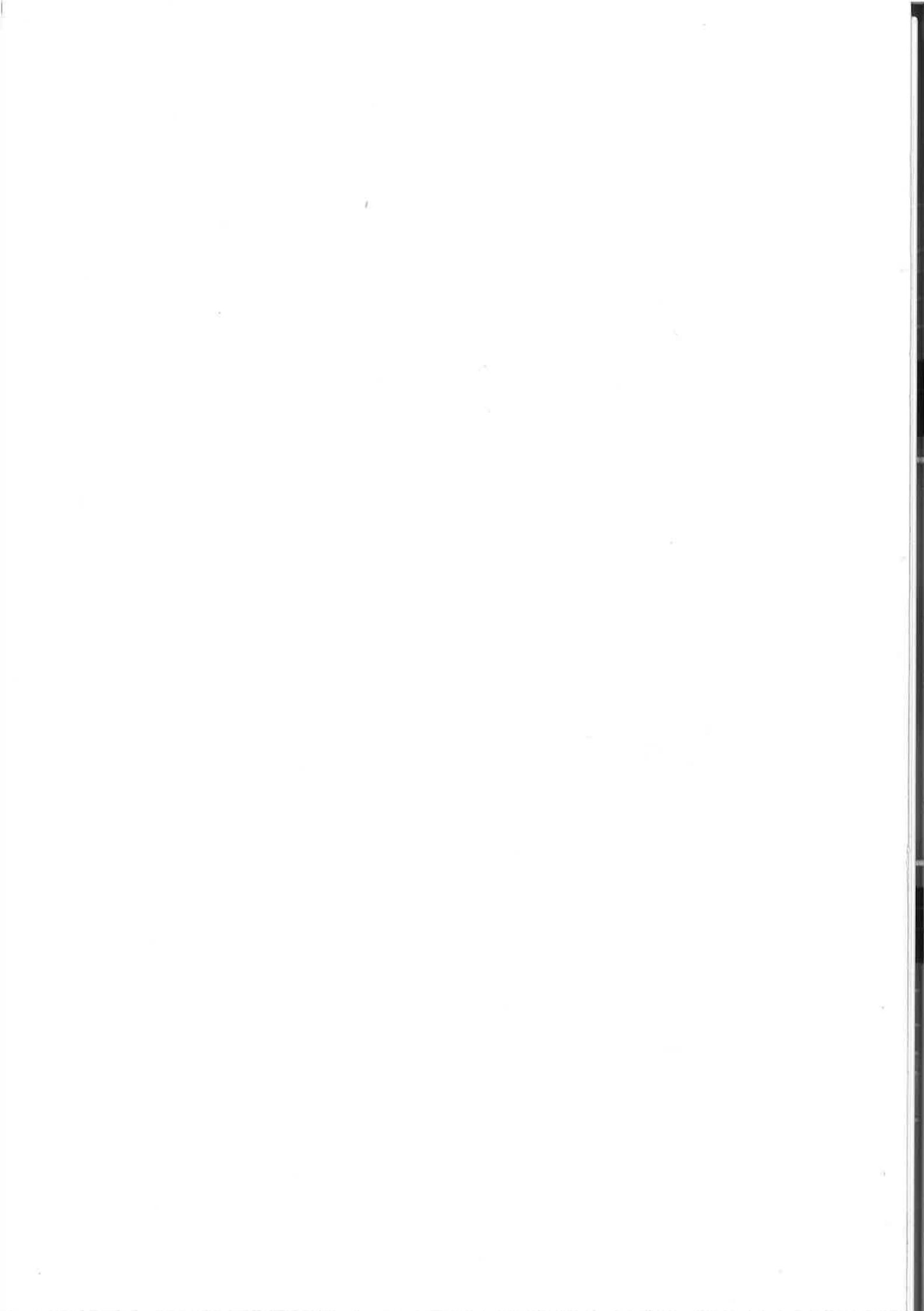
発行 二丈町教育委員会

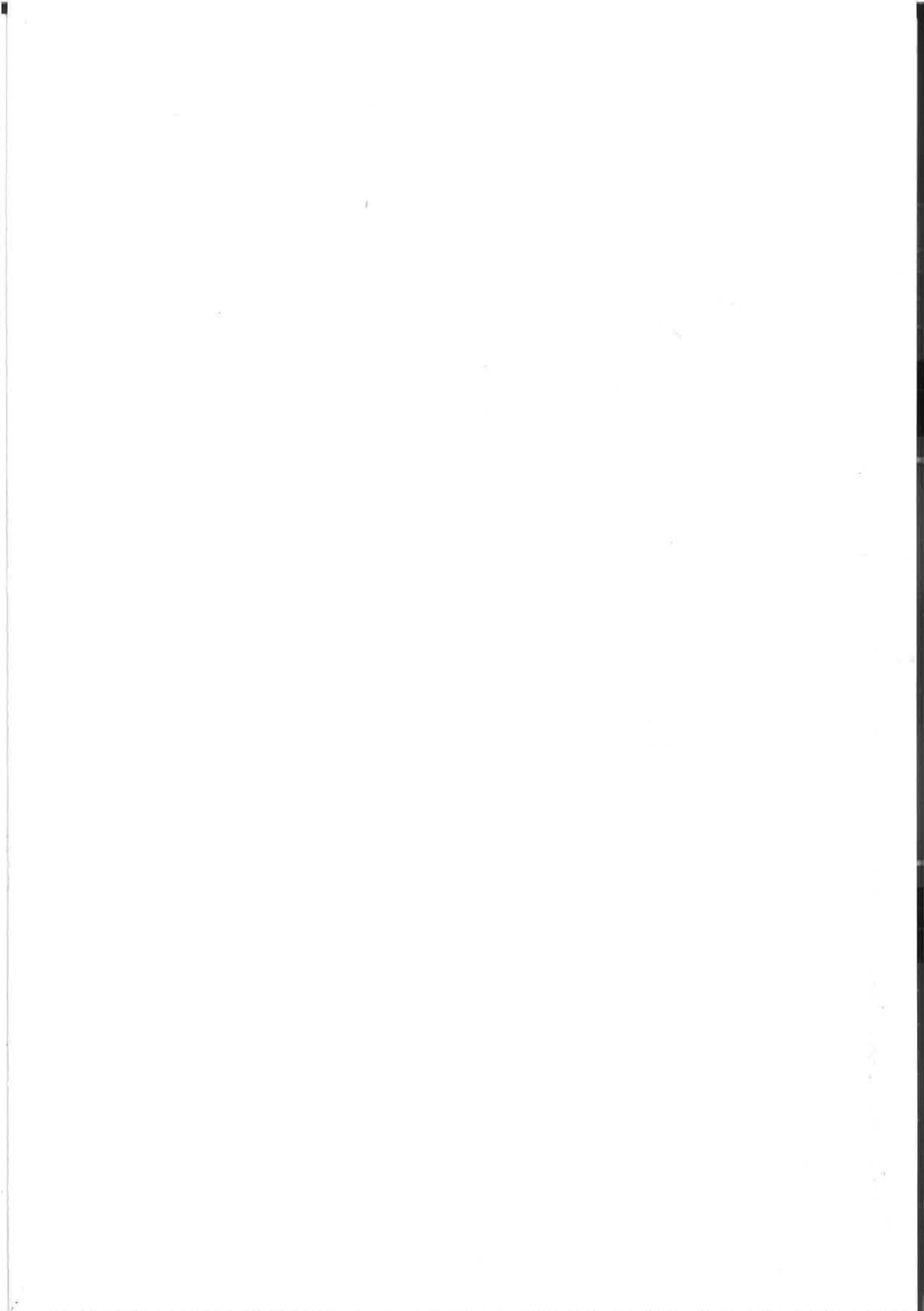
福岡県糸島郡二丈町大字深江1360番地

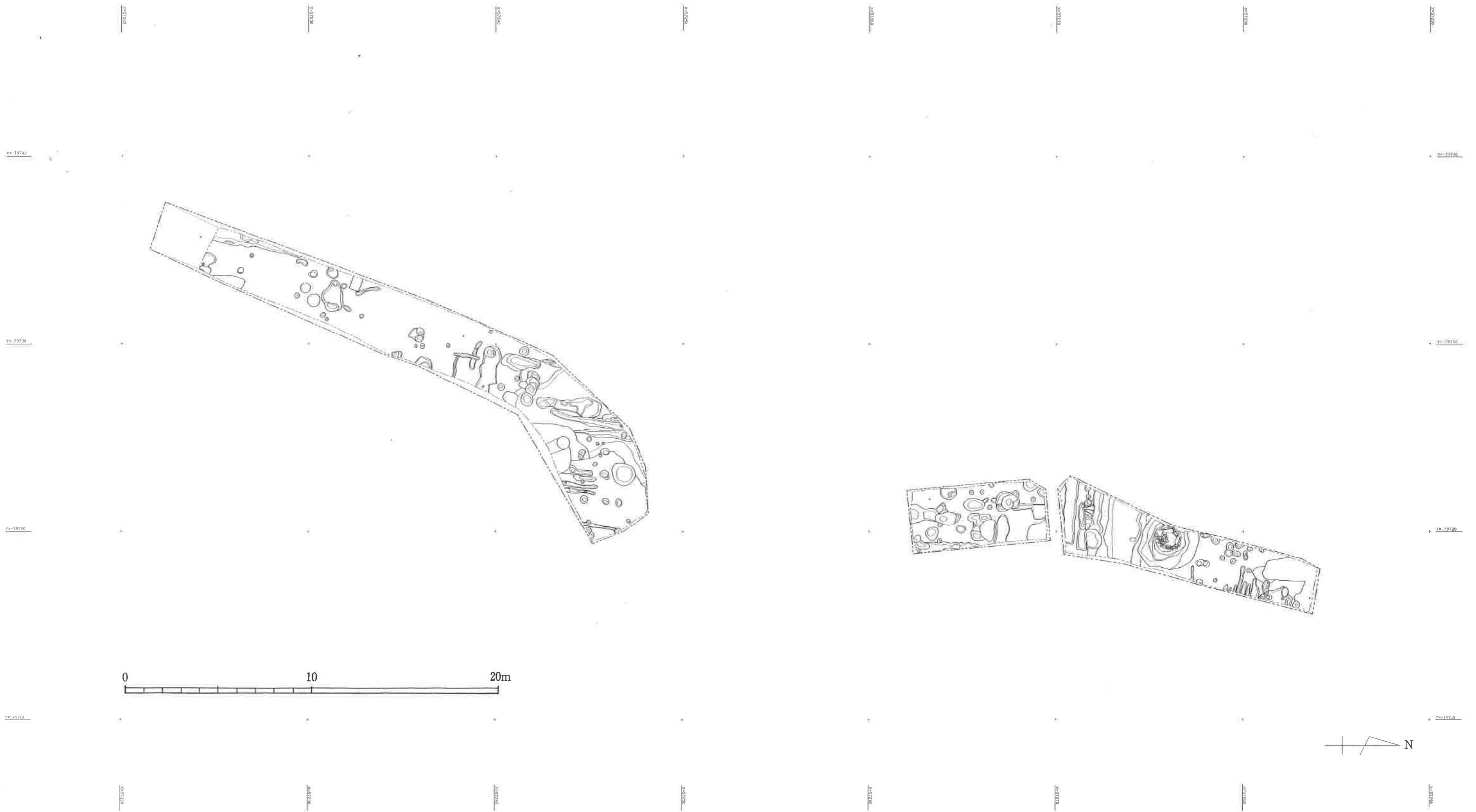
印刷 大同印刷株式会社

佐賀県佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20

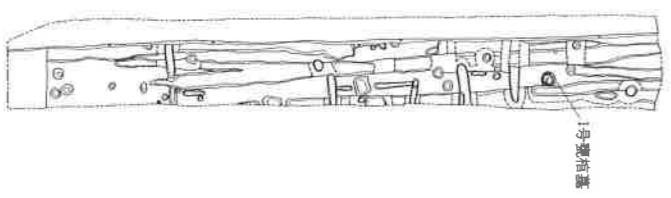








第4図 第2次調査 全体図 ( $S=1/200$ )



0 10 20m

N

第20図 第5次調査 全体図 (S=1/200)